

下富前遺跡

—富地区県営担い手育成ほ場整備事業に伴う発掘調査Ⅲ—

平成16年3月

宮城県瀬峰町教育委員会

下富前遺跡

一富地区県営担い手育成ほ場整備事業に伴う発掘調査Ⅲ—

平成16年3月

宮城県瀬峰町教育委員会



瀬峰町の遠景
低丘陵上に多くの遺跡が立地する。



1947年の下富前遺跡
微高地の周囲に旧河川の流路がある。



19号建物跡
カラー図版

発刊の辞

このたび、瀬峰町文化財調査報告書第23集『下富前遺跡』を刊行することになりました。

下富前遺跡は、県営担い手育成ほ場整備事業に伴いまして平成8年度より発掘調査を開始しました。工事により破壊される部分の調査は平成11年度、平成13年度、平成14年度に行っております。遺跡の面積に比べますとまだまだ調査を行った面積は少ないのですが、それでもさまざまな事が判明してきております。詳細については本書の内容に譲りますが、下富前遺跡では、縄文時代、奈良・平安時代、中世の各時期に人々が活動した様々な痕跡が大地に刻まれており、各時代の人々がどのような生活をしていたのかを想像することは興味が尽きません。今回の報告をもとに、町内の諸遺跡、宮城県北部にある諸遺跡などと比較検討を行うことでさらに様々なことが判明していくことでしょう。

最後に、調査を進めるにあたりご指導、ご協力いただきました宮城県教育庁文化財保護課、宮城県築館産業振興事務所の皆様、快く調査にご協力いただきました地権者の皆様、寒い中作業にあたられた作業員の皆様に感謝を申し上げて発刊のあいさつといたします。

平成16年3月

瀬峰町教育委員会教育長 濱田利昭

目 次

発刊の辞	
目 次	
例 言	
I. 遺跡の位置と地理的・歴史的環境.....	1
II. 調査に至る経緯.....	3
III. 25~27区（第5・8次調査）で検出した遺構と遺物.....	5
1. 基本層序.....	5
2. 検出した遺構と遺物.....	5
IV. 28区（第6次調査）で検出した遺構と遺物.....	22
1. 基本層序.....	22
2. 検出した遺構と遺物.....	22
V. 下富前遺跡出土遺物について（補遺）.....	26
VI. 考察.....	29
1. 25~27区について.....	29
2. 28区について.....	35
3. 平安時代における遺跡の性格について.....	36
VII. まとめ.....	36
引用参考文献	
図 版	
附章 濑峰町大里地区県営担い手育成は場整備事業に伴う確認調査・工事立会報告	
I. 位置と歴史的・地理的環境について.....	47
II. 濑峰町大里中本寺地区（伝「茂林寺」跡）.....	47
1. 調査に至る経緯.....	47
2. 虎浜寺と伝「茂林寺」について.....	50
3. 基本層序.....	50
4. 検出した遺構と遺物.....	51
5. まとめ.....	53
III. 濑峰町大里字中新井堀地区.....	54
1. 調査目的と経緯.....	54
2. 試掘の概要.....	55
3. まとめ.....	55
図 版	

図 目 次

第1図 濑峰町の位置.....	1
第2図 下富前遺跡の位置と周辺の遺跡.....	2
第3図 調査区の位置.....	4
第4図 25~27区平面図.....	6
第5図 104号住居跡.....	7
第6図 104号住居跡出土遺物.....	7
第7図 108号住居跡.....	8
第8図 19号建物跡模式図.....	9
第9図 19号建物跡出土遺物.....	9
第10図 19・91号建物跡.....	10
第11図 91号建物跡模式図.....	11
第12図 116号建物跡模式図.....	11
第13図 117号建物跡模式図.....	11
第14図 116・117号建物跡.....	12
第15図 11号井戸跡.....	12
第16図 102号井戸跡.....	12
第17図 113号井戸跡.....	13
第18図 114・115号井戸跡・111号溝跡.....	13
第19図 13・103号土坑.....	14
第20図 105号土坑.....	14
第21図 103号土坑出土遺物.....	15
第22図 106号土坑.....	15
第23図 107号土坑.....	16
第24図 109号土坑.....	16
第25図 112号土坑.....	16
第26図 7号溝跡断面.....	17
第27図 2号溝跡出土遺物.....	18
第28図 95号溝跡断面.....	18
第29図 溝跡出土遺物.....	19
第30図 表土・遺構外出土遺物.....	20
第31図 97号建物跡模式図.....	22
第32図 28区平面図.....	23
第33図 28区と周辺の調査区.....	24
第34図 98・100号土坑.....	25
第35図 99号土坑.....	25
第36図 下富前遺跡採集遺物（1）.....	27
第37図 下富前遺跡採集遺物（2）.....	28

表 目 次

第1表	104号住居跡出土遺物集計表	7	第13表	7号溝跡出土遺物集計表	17
第2表	108号住居跡主柱穴規模	8	第14表	95号溝跡出土遺物集計表	20
第3表	108号住居跡出土遺物集計表	8	第15表	表土・遺構外出土遺物集計表	20
第4表	19号建物跡出土遺物集計表	9	第16表	検出遺構属性表	21
第5表	19号建物跡柱穴規模	9	第17表	97号建物跡柱穴規模	22
第6表	91号建物跡柱穴規模	11	第18表	96号崩跡出土遺物集計表	25
第7表	116号建物跡柱穴規模	11	第19表	99号土坑出土遺物集計表	25
第8表	117号建物跡柱穴規模	11	第20表	基本層序出土遺物集計表	26
第9表	13号土坑出土遺物集計表	14	第21表	検出遺構属性表	26
第10表	103号土坑出土遺物集計表	14	第22表	25~27区検出遺構の重複関係	32
第11表	109号土坑出土遺物集計表	16	第23表	28区検出遺構の重複関係	35
第12表	2号溝跡出土遺物集計表	17			

図 版 目 次

カラー	漸峰町の遠景、1947年の下富前遺跡、19号建物跡				
図版 1	27区全景（北より）	図版 5	112号井戸跡（東より）		
	26区全景（北より）		113号土坑（北より）		
	108号住居跡（南より）		28区全景（南より）		
図版 2	104号住居跡（南より）	図版 6	96号崩跡（南より）		
	19号建物跡南辺（25区、南より）		96号崩跡（西より）		
	19号建物跡（26区、南より）		96号崩跡（西より）		
図版 3	19号建物跡（2区、南より）	図版 7	96号崩跡北西隅（北より）		
	13号土坑、103号土坑（南より）		96号崩跡断面（北より）		
	103号土坑断面（南より）		97号建物跡（西より）		
図版 4	103号土坑遺物出土状況	図版 8	出土遺物		
	2号溝跡（東より）				
	95号溝跡（南より）				

附章図目次

第38図	調査区の位置と周辺の遺跡	47	第43図	確認調査区	51
第39図	本寺地区周辺の航空写真	48	第44図	1号近世墓	52
第40図	漸峰町作製の地籍図	48	第45図	遺構外出土遺物	53
第41図	明治19年大里村作製の地籍図	49	第46図	ピット1断面	55
第42図	調査区と基本層序	51	第47図	調査区平面図	56

附章表目次

第24表	基本層序	50	第26表	新井堀地区出土遺物集計表	55
第25表	本寺地区遺物集計表	52			

附章図版目次

図版 9 本寺地区

図版10 新井堀地区

例　　言

1. 本書は富地区県営担い手育成は場整備事業にかかる下富前遺跡（第5、6、8次調査）の発掘調査報告書である。また、附章に大里地区県営担い手育成は場整備事業にかかる確認調査、工事立ち会いの概要報告を採録した。
2. 調査は以下の要項で実施した。

【遺跡名】	下富前遺跡（宮城県遺跡登載番号: 46047）
【所在地】	宮城県栗原郡瀬峰町大里字富下富前地内
【調査面積】	第5次調査 約 10m ² 第6次調査 約400m ² 第8次調査 約700m ²
【調査期間】	第5次調査 平成14年10月23日～10月25日 第6次調査 平成15年 2月27日～3月 3日 第8次調査 平成15年11月10日～12月16日
【調査主体】	瀬峰町教育委員会教育長 濱田利昭
【調査担当】	瀬峰町教育委員会社会教育課主事 安達訓仁
【調査指導】	宮城県教育厅文化財保護課
【調査協力】	宮城県築館産業振興事務所、瀬峰町産業課、瀬峰町下富地区（区長伊東有一） 大場次郎、遠藤隆市、（株）佐々貞土建、（有）セミナ測量
【調査参加者】	第5次調査 小野寺敬典、宍木広美、鈴木茂、高橋崇行、高橋昭三、千葉栄子 門脇菊男、今野敏則（（株）佐々貞土建） 第6次調査 小野寺明、星宗久美子 門脇菊男、千葉良喜、鈴木幸春（（株）佐々貞土建） 第8次調査 伊東有一、伊東良よし、小野寺敬典、後藤雄一郎、坂元幸生、佐藤貞夫 宍木広美、鈴木茂、高橋一正、高橋崇行、高橋昭三、千葉栄子、三神きみ子 佐々木章子、翔多、らんな、鈴木雄孝
【整理参加者】	宍木広美、千葉栄子、星宗久美子
【事務局】	瀬峰町教育委員会社会教育課 課長 佐々木 徹 同 上 課長補佐 佐藤 恒介 同 上 主事 安達 訓仁
3. 調査における地区割りは点S 5、点S 6上の点（X-150214.782、Y20832.069、日本測地系第X系）を原点とし、3mグリッドの局地座標を設定した。この座標は真北に対し、N 19° 45' E の傾きをもつ。
4. 遺構番号は第2次調査からの通し番号を各遺構に付した。また、平成14年12月に遺物登録番号について1次調査からの通し番号を付け直した。したがって、前回までの報告と現在の遺物登録番号は変更してある。
5. 今回の調査により、前回まで不明であった遺構の詳細を得ることができた。前回までの報告と異なる記述は、本書が優先する。
6. 土層や土器の色調表現については『新編標準土色帳(20版)』(小山・竹原編1997、(株)日本色研事業)に準拠し、土性区分については国際土壤学会に準拠している。
7. 図中にある方位は真北を表している。
8. 遺構の縮尺は1/60、建物跡は1/100を基本とし、遺構断面図は1/60に統一し、スケールを添えた。また、石碑以外の遺物は1/3に統一した。なお、須恵器は断面黒塗りとしている。
9. 建物跡模式図で●は柱痕跡（抜き取り痕含む）を確認したもの、○は柱痕跡が確認できないものを示す。
10. 遺物写真的縮尺は任意である。
11. 第2、38図は国土地理院作成1/25,000築館、高清水を複製し、使用した。カラー図版「瀬峰町の遠景」は、宮城県築館産業振興事務所が撮影したものを、許可を得て掲載した。
12. 発掘調査及び報告書作成に際し、次のの方々よりご指導、ご助言をいただきました。
後藤秀一、佐久間孝平、柳沢和明（宮城県教育厅文化財保護課）、佐藤信行（日本考古学協会員）、佐藤敏幸（矢本町教育委員会）、村木志伸（東北芸術工科大学）
- 宮城県教育厅文化財保護課
13. 調査によって得られた資料は、全て瀬峰町教育委員会で保管している。
14. 本書の執筆、編集は、瀬峰町教育委員会社会教育課主事安達訓仁が行った。

I. 遺跡の位置と地理的・歴史的環境

宮城県の北西部に位置する瀬峰町は栗原郡の中でも南東端に所在する。下富前遺跡は瀬峰町を東西に横切るなだらかで低平な4つの丘陵中、寺沢丘陵南側、小山田川北岸の標高約7m程の微高地に位置し、南側には沖積地が広がる。遺跡は、現在、田地、畑地に利用されており、昭和22年のアイオン台風による土取り、昭和30年代頃の開田により、保存状況が不良な地点が多い。



第1図 瀬峰町の位置

本遺跡の基盤は疊層、砂岩、泥岩、凝灰岩からなる瀬峰層（鮮新世）で、その上に疊層と凝灰岩から構成される高清水層（更新世）、さらに最上層には第四系のローム層が堆積しており、丘陵上に所在する町内の諸遺跡とほぼ同じ様相である。

下富前遺跡周辺の丘陵上には多くの遺跡が所在する。ここでは、これまでの調査・研究を踏まえ、遺跡周辺の古墳時代後期から近世頃までの歴史的環境を記述する。

古墳時代後期の遺跡には泉谷館跡、三代遺跡などがあり、いずれも標高約20~30m前後の丘陵上に位置している。泉谷館跡では11棟の住居跡を検出し、栗廻式期の土器とそれと並行すると考えられる関東地方鬼高式期の土器が出土している。

同様の関東系土器は出土状況は明瞭ではないものの、民生病院裏遺跡、大境山遺跡からも出土している。三代遺跡では、栗廻式期の中でも新しい段階に属する資料が得られている。

瀬峰町で遺跡の数が最も多いのは奈良・平安時代で、49遺跡を数えることができる。桃生田前遺跡、下富前遺跡は沖積地を望む微高地に立地する。現在までに寺沢丘陵の岩石I遺跡、大境山遺跡、寺沢丘陵東端の長者原II遺跡、民生病院裏遺跡、下藤沢II遺跡、下藤沢III遺跡、清水山I遺跡、荒町丘陵の長根遺跡、四ッ塙原丘陵の四ッ塙遺跡で集落を確認している。一連の調査によって多数の住居跡と豊富な遺物が発見され、各住居跡が適度に散在する現象が顕著に認められている。宮城県北部における集落構造の一タイプとして抽出されるものであろう。一方、集落以外の遺跡はほとんど確認しておらず、藏骨器が出土した蒲盛遺跡が墓制に関する遺跡として知られているのみである。

中世の城館跡は藤沢館跡などがある。瀬峰川沿いの丘陵上に構築された単郭式で小規模のものである。下富前遺跡では14世紀代の龍泉窯系青磁皿の破片が採集され、発掘調査で小規模な建物跡や井戸跡を確認している。中世と考えられる塚には泉谷館跡の方形溝状造構がある。堆積層の状況からマウンドを持つ鎌倉時代中期から後期にかけての宗教的な塚と考えている。その他に経塚と考えられる経塚遺跡、鎌倉時代の和鏡が出土した寺沢遺跡がある。板碑は大正年間に20数基あったが、近年、所在不明となっているものがあり、現在では18基確認しているに過ぎない。

現在の瀬峰町は、近世には奥州仙台領栗原郡の藤沢村、富村、中村に分かれていた。藤沢村には栗原郡と登米郡を結ぶ佐沼街道（高清水宿→佐沼宿→登米宿）の宿駅、瀬嶺宿が設置された。この瀬嶺宿の西方2.5kmには県指定史跡瀬峰一里塙がある。泉谷館跡は仙台藩士橋本氏（知行高80貫380文）

I. 遺跡の位置と地理的・歴史的環境

の在郷屋敷で、発掘調査により掘立柱建物跡や西門跡、塙跡などを検出した。中村の荒町地区には除と呼ばれる所がある。仙台藩土蟻坂氏の在郷屋敷で、寛永21年（1644）に所替となるまで居住したと伝えられる。町内には多数の塙があるが、確実な近世の塙は佐沼街道の一里塙、諏訪原經塙、清林塙、発掘調査によりマウンドをもつ墓と判明した下藤沢II遺跡及び下藤沢III遺跡の塙群だけである。



II. 調査に至る経緯

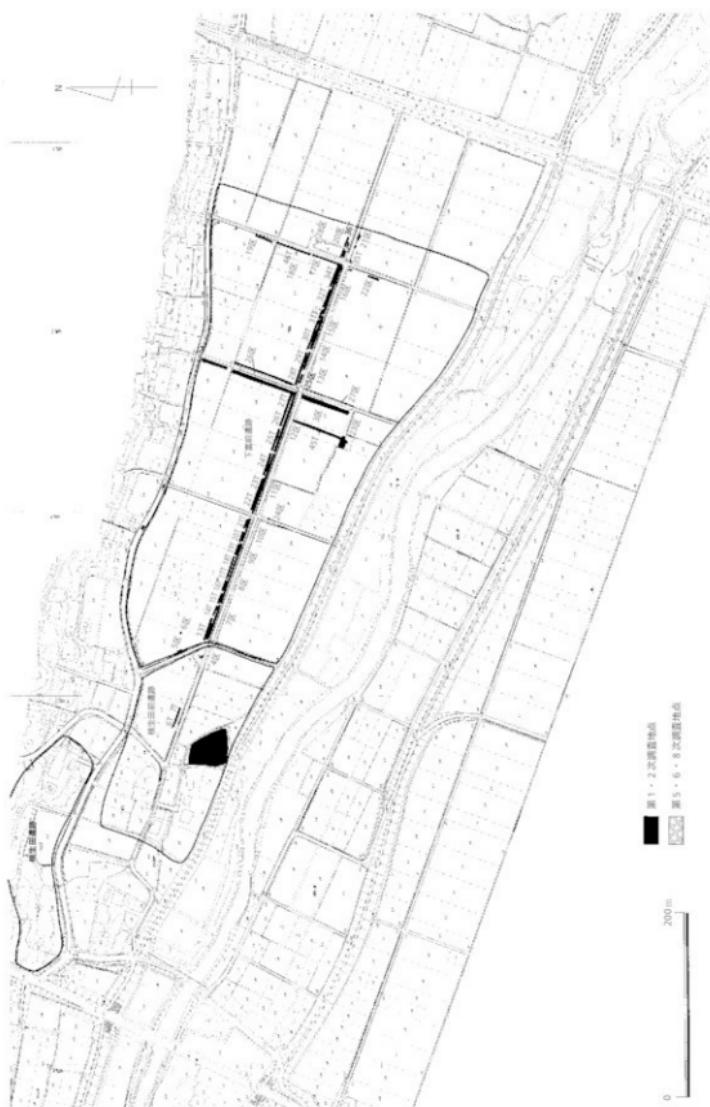
平成11年度及び13年度に工区内の切土工及び水路、パイプライン部分など工事により破壊される部分の事前調査は終了したが、2区、12区で検出した19号建物跡についてはその規模を確定することができなかった。前回までの調査では農道のため調査を実施できなかった地点もある。パイプラインは農道下部を通り工事による影響を受けるため、この地区を対象として第5次調査の計画を行い、平成14年8月に宮城県教育庁文化財保護課、宮城県建築産業振興事務所、瀬峰町産業課、瀬峰町教育委員会で該当部分の取り扱いについて協議を行った。その結果、ほ場整備事業の工事開始直前頃に事前調査を実施することとなった。また、平成13年度に実施した際、多数の縄文土器が出土した8区周辺は安全確保のため調査区を縮小して調査を実施したので、パイプライン敷設の際に土器の回収を行うこととした。

第5次調査は平成14年10月23日に開始した。開始前の打ち合わせ時に水路は道路を横断しないとの計画変更があったため、調査対象はパイプライン部分のみとした。調査区を25区とし、3m四方の調査区を設定し、重機により表土を除去し遺構確認作業を行った。その結果、溝跡1条、ピット7基を検出した。これらのうち2基は19号建物跡南側柱列であり、さらに東に延びるかどうか調査区を設けたが検出できなかったので桁行5間、梁行2間であると想定した。引き続き各種記録類の作成を行い、25日に終了することができた。なお、平面図は1/20で作成し、写真記録は35mmカメラ（リバーサル、モノクロ）を用いた。また、11月29日に土器の回収を実施した。

第5次調査後、面工事の開始により農道が撤去され現田面付近まで掘削をうけた。農道の撤去は協議されていなかった。遺構面と田面レベルの検討を行った結果、南側農道は確実に影響を受け、北側でも一部影響が想定された。そのため、11月18日宮城県教育庁文化財保護課、宮城県建築産業振興事務所、瀬峰町教育委員会、（株）佐々貞土建で協議を行い、該当部分を旧状に戻し、平成15年度に事前調査（第8次調査）を実施することとした。面工事による影響を受けないと考えられる深い遺構の掘り下げは極力行わないこととし、北側では遺構面の標高を確認し、事前調査が必要かどうか検討することとした。但し、落水溝6本分については上幅50cm、下幅20cmで掘削されることから、平成15年1月15日付けで発掘通知の提出後、3月3日に4本分の工事立ち会いを実施し、遺構をさけて落水管の敷設を行ったが、一部遺構（95号溝跡）と重複するため遺構の掘り下げを行った。

平成15年2月10日、工事で表土が移動したことにより遺物が採集できることが予想されるため踏査を行ったところ、28区として調査を行った地点が工事により地山面が露出し、遺構と考えられる黒色土が露出した状況となっていた。ここは平成8年度の確認調査により遺構検出面のレベルは面工事により影響を受けないと判断した地点であった。このため、宮城県教育庁文化財保護課、建築産業振興事務所、瀬峰町産業課、（株）佐々貞土建に連絡を行い、2月14日に現地で協議を行った。これ以上掘削が及ばないことから確認調査を実施することとし、平成15年2月27日から調査を開始した。表土除去、遺構検出作業を行い、遺構はまばらであることを確認した。3月3日までには調査区の拡張や一部遺構の掘り下げを行い、各種記録の作成をし、調査を終了することができた。この地区での最終

II. 調査に至る経緯



第3図 調査区の位置図

的な検出遺構数は建物跡1棟、堀跡1条、土坑3基、溝跡2条、ピット12基であった。

第8次調査は平成15年6月30日付けで発掘届の提出を受け、10月30日付けで委託契約を結んだ。

11月10日にプレハブ設置、器材搬入の後に12日まで重機により表土除去を行った。引き続き遺構検出作業を行い、各種遺構を確認した。特に19号建物跡は梁行が当初の想定と異なり桁行5間、梁行2間で東側に1間分の廊があることが判明した。最終的な遺構の数は竪穴住居跡2棟、建物跡4棟、井戸跡5基、土坑8基、溝跡7条、ピット152基である。作業の結果、26区の井戸跡と27区の2号溝跡、井戸跡を除く遺構は面工事の影響を受けることが判明したので事前調査とした。12月16日までには各種記録（1/20の平面図および断面図、35mmによる写真撮影、文章記録）の作成を終了し、器材の搬出を行い野外調査を終了することができた。途中、公民館事業として12月2日に『体験教室親子で発掘』を開催した。

引き続き、平成16年3月20日まで整理作業（註）を行い、3月24日には事業の一切を終了した。

註 遺物の水洗いについては平成15年11月29日山形県東北芸術工科大学で開催された『第1回東北文字資料検討会』で報告されたブラシを用いない洗浄方法により実施している（武田和宏2003）。ブラシを用いない方が器面の状況は格段に良好ではあるが、今回は出土量が少なかったためブラシを用いて洗浄するよりも時間がかかる結果となった。

III. 25～27区（第5、8次調査）で検出した遺構と遺物

調査区は平成11年度に実施した2、3区、平成13年度に実施した12、13区に隣接する。前回までの調査区と一部重複する。ここは下富前遺跡の中でも遺構を多数検出している地点である。

1. 基本層序

25区の基本層序は下富前遺跡3次調査12区周辺（瀬峰町教育委員会2002）と同一であり、基本層序Ⅰ層上面まで昭和30年代頃の開田により切り土後にⅠ層が盛土される。

基本層序Ⅰ層 現道のための盛土層である。第3次調査では2層に細分したが性格は同じであり、同一層として扱う。黒褐色（10YR2/2～3/1）粘土質シルトで、遺構面までは約70～80cmである。

基本層序Ⅱ層 明黄褐色（10YR6/6）粘土である。しまりが強く、粘性に富む。本遺跡での地山であり、遺構検出はすべてこの面で行っている。

26区では平成14年度に切り土後の盛土（層厚約30cm）と基本層序Ⅰ層（層厚約10cm）を除去すると遺構面（Ⅱ層）となる。27区では平成14年度の盛土（層厚約50～65cm）を除去すると遺構面（Ⅱ層）となる。

2. 検出した遺構と遺物

検出した遺構は住居跡2棟、建物跡4棟、井戸跡5基、土坑8基、溝跡9条、旧河川跡1ヶ所、ピット152基である。



第4図 25~27区平面図 (2・3・12・13区を含む)

(1) 住居跡と出土遺物

104号住居跡

〔位 置〕 E7、S11~12.5付近。

[調査区] 27区。

〔確認面〕 II層。

[重複] 104号住居跡→ピット

〔規模・平面形〕南北1.4m以上、東西1.1m以上、北西隅付近を検出。東側は削平により残存しないが方形を基調とすると考えられる。

[方 向] N-60° - E (西辺)。

[層 位] 残存しない。

[壁] 残存しない。

[床 面] 掘り方理土を床。黒褐色粘土。深さ0.05m。

[周 溝] 幅0.24m、深さ0.20mで上幅は出入りがある。底面付近で幅0.05~0.10mの材痕跡を確認。1層は材抜き取り後の堆積層で自然堆積。2層は材を据えるための掘り方理土である。

[出土遺物] 材抜き取り痕より土師器坏、甕、鉢、鉄製品が出土している。

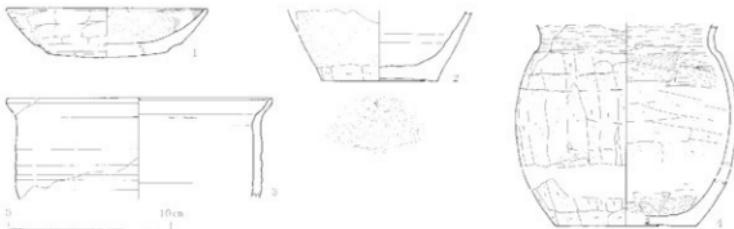


No.	土 色	土 性	含有物等	堆積範囲
1	黒褐色 (10YR3/3)	粘 土	地山土を剥ぎだし、土留を多く含む	材抜き取り範
2	黒褐色 (10YR3/3)	砂質粘土	地山ワット、地山、黒褐色土を多く含む	材抜き取り土
3	黒褐色 (10YR3/3)	土圭シト	地山土を多く含む	自削型土理土

第5図 104号住居跡

種 別	土 地 図				鉄製品	粘土塊	合計
	重	年	鉢?	不明			
1 破	15	6	1	6	1	1	30

第1表 104号住居跡出土遺物集計表



No.	層位	遺物名	面積	残存	最高	ODH	底径	特 徴	登録	ID版
1	1 附 土 壁 壓	坏	1/2	3.0	12.2	7.4	—	木:筋(カツリ)、瓦:筋(10YR3/2)～(10YR3/3)、瓦:テラコ、地山:白(10YR3/1)、地山:白(10YR3/1)、地山:白(10YR3/1)	R261	—
2	1 附 土 壁 壓	實	底~8.5	—	—	7.2	—	瓦:筋(カツリ)、瓦:筋(10YR3/1)、瓦:筋(10YR3/1)、瓦:ロコリテ、瓦:テラコ(12.5YR3/2)	R255	—
3	1 附 土 壁 壓	實	口~底部	—	16.4	—	—	瓦:ロコリテ、地山:12.5YR3/2、瓦:ロコリテ、瓦:10YR3/1～10YR3/2、地山:10YR3/1～10YR3/2、地山:白	R256	—
4	1 附 土 壁 壓	實	2/5	—	—	8.6	—	木:筋(カツリ)、瓦:10YR3/0～10YR3/1、瓦:テラコ、瓦:テラコ、瓦:10YR3/1～10YR3/2	R258	—

第6図 104号住居跡出土遺物

108号住居跡

[位 置] E2~6.5、S2~4.5付近。

[調査区] 27区。

[確認面] II層。

[重 複] 108号住居跡→107号土坑、ピット

[規模・平面形] 南北2.5m以上、東西3.3m以上、隅丸方形。水路により西側を削平されるが、北側法面を含めて推定すると東西は4.8mと考えられる。

[方 向] N-14° - E (東辺)。

[層 位] 大別 1層。自然堆積。

[壁] II層。調査区は削平により残存しないが、断面で見ると西側で0.17m残存。

[床 面] 掘り方理土を床。黒色粘土。深さ0.15m。

[柱 穴] ピット1は主柱穴。隅丸方形。抜き取り痕を確認した。

[周 溝] 幅0.30m、深さ0.09mで高低差はほとんどない。南西側は削平により検出できなかった。自然堆積。

III. 25~27区(第5、8次調査)で検出した遺構と遺物

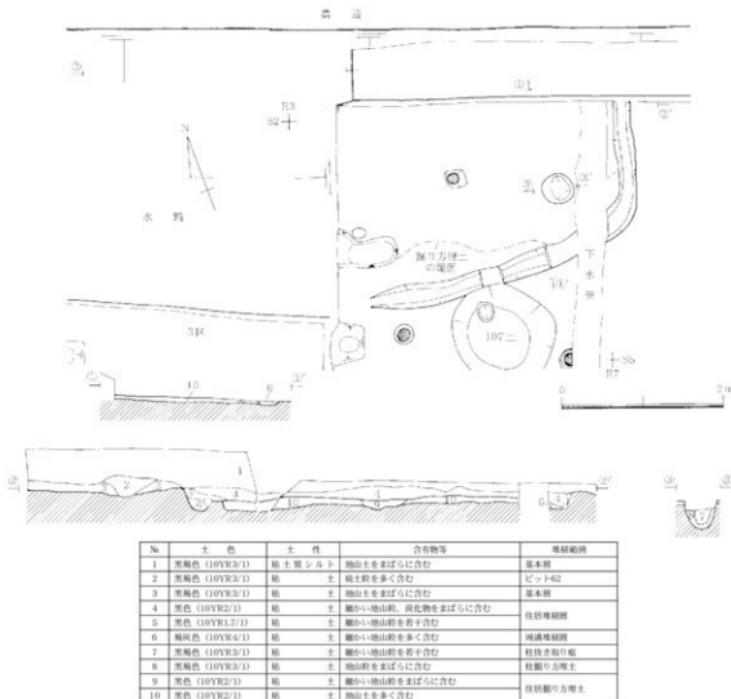
[出土遺物] 堆積層より土師器壺、甕、須恵器甕、掘り方埋土から土師器甕が出土している。土師器はいずれも非口クロ調整である。小片のため図示できなかった。

No	種別	範囲、深さ(cm)	回数
P1	掘り方	38×39, 37	個人形
後 取 瓢		22×31, 30	個人形

第2表 108号住居跡主柱穴規模

別位	種別	土	磚	瓦	积水	合計
住	柱	3	1	2	6	
掘	方	1	0	0	1	
合	計	4	1	2	7	

第3表 108号住居跡出土遺物集計表



第7図 108号住居跡

(2) 建物跡と出土遺物

19号建物跡

[位置] EW 0~E8、N 4~16.5付近。

[調査区] 2区、12区、25区、26区。

[確認面] II層。

[重複] 19建→14建・109土・95溝・溝・ピット

[構造・方向] 南北棟、東廂付掘立柱建物跡。南側から2間で間仕切りの柱穴がある。

[規模] 身舎桁行5間(西側11.08m)、梁行2間(南側4.63m)、廂1間(2.20m)。

[方位] N-12° - E (西側柱列)。

[延べ床面積] 身舎52.04m²、廂24.38m²。

[柱穴掘り方] 平面形: 圓丸形～圓長形。

埋土: 地山土を多く含む黒褐色～褐色シルト。

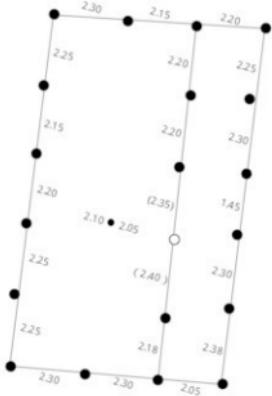
[柱抜き取り痕] 4ヶ所で検出。

[柱痕跡] 円形～楕円形。堆積層: 地山粒を含む黒褐色粘土質シルト。

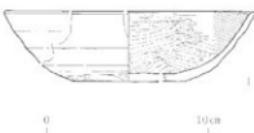
[出土遺物] 柱穴掘り方、柱痕跡、抜き取り痕から土師器(口クロ、非口クロ)、須恵器が出土している。

種別	土 壤 図			地物図		合計
	地	実	(27)	不明	裏	
P 1 剥り方	0	1	實	0	0	1
P 2 剥り方	0	2	0	0	0	2
P 3 剥り方	0	0	0	0	1	1
P 4 剥り方	0	1	0	0	0	2
P 5 剥り方	0	1	0	0	1	2
P 6 剥り方	0	1	0	0	0	1
P 7 剥り方	0	1	1	0	0	2
P 8 剥り方	0	2	0	0	0	2
P 9 剥り方	0	1	0	0	1	2
P 10 剥り方	0	1	0	0	0	1
P 11 剥り方	1	0	0	0	0	0
P 12 剥り方	1	1	0	0	0	1
P 13 剥り方	0	0	0	0	2	2
P 14 剥り方	0	0	0	1	0	1
P 15 剥り方	0	4	0	1	0	5
合 計	4	15	1	2	4	27

第4表 19号建物跡出土遺物集計表



第8図 19号建物跡模式図



%	部位	遺物名	断面	残存	断面	口径	底径
1	P15剥き取り板	土 壤 図	井	1/3	4.4	15.4	6.8

注: ロクロナガ、亂部付近を手打ちラグアリ、いがい須恵器(19YR1/4)、底: 手打ちラグアリの背調査、内: ミサキ、荒削面、底: UNL5.1刀 R2B -

第9図 19号建物跡出土遺物

%	種別	範囲	深さ (m)	平面形	%	種別	範囲	深さ (m)	平面形	%	種別	範囲	深さ (m)	平面形	
P 1	剥り方	82×93, 35	楕丸形	P 8	剥り方	84×-, 23	楕丸形	P 15	剥り方	65×90, 28~36	楕丸長方形	P 16	剥り方	47×50, 28~36	楕丸長方形
		47×50, 11	円形	P 9	剥り方	20×22, 21	円形	P 17	剥り方	40×43, 20	円形	P 18	剥り方	40×43, 20	楕円形
		23×25, 37	円形	P 10	剥り方	(55)×75, 27	楕丸長方形	P 19	剥り方	22×24, 34	円形	P 20	剥り方	90×95, 50	楕丸長方形
P 2	剥り方	93×96, 36	楕丸形	P 11	剥り方	20×22, 26	楕丸長方形	P 21	剥り方	20×20, 57	円形	P 22	剥り方	75×80, 28	楕丸長方形
		28×30, 30	円形	P 12	剥り方	75×80, 46	楕丸形	P 23	剥り方	22×25, 28	円形	P 24	剥り方	55×90, 31	楕円形
P 3	剥り方	94×99, 38	楕丸形	P 13	剥り痕	CSN×65, 24	楕丸形	P 25	剥り方	25×25, 17	円形	P 26	剥り方	58×63, 18	楕丸形
		24×25, 30	円形	P 14	剥り方	(60)×95, 52	楕丸形	P 27	剥り方	20×30, 17	楕円形	P 28	剥り方	55×68, 20	楕円形
P 4	剥り方	79×85, 26	楕丸形	P 15	剥り方	20×22, 45	円形	P 29	剥り方	25×25, 17	円形	P 30	剥り方	23×32, 16	楕円形
		25×26, 19	円形	P 16	剥り方	80×105, 58~61	楕丸形	P 31	剥り方	45×45, 14	楕丸形	P 32	剥り方	20×20, 15	円形
P 5	剥り方	73×95, 29	楕丸形	P 17	剥り痕	38×40, 38	楕丸形	P 33	剥り方	20×25, 61	円形	P 34	剥り方	20×30, 17	楕円形
		25×26, 29	円形	P 18	剥り方	98×104, 44	楕丸形	P 35	剥り方	55×68, 20	楕円形	P 36	剥り方	23×32, 16	楕円形
P 6	剥り方	89×102, 50	楕丸形	P 19	剥り痕	20×25, 44	楕丸形	P 37	剥り方	45×45, 14	楕丸形	P 38	剥り方	20×20, 15	円形
		27×49, 25	円形	P 20	剥り方	57×67, 29	楕丸長方形	P 39	剥り方	20×25, 29	円形	P 40	剥り方	20×25, 29	楕丸形
P 7	剥り方	95×95, 36	楕丸形	P 21	剥り痕	20×28, 29	円形	P 41	剥り方	20×25, 17	円形	P 42	剥り方	20×25, 17	楕円形
		20×22, 25	円形												

第5表 19号建物跡柱穴規模

9号建物跡

[位置] W 3 ~ E 3.5, N 2 ~ 3.5付近。

[調査区] 12区、25区。

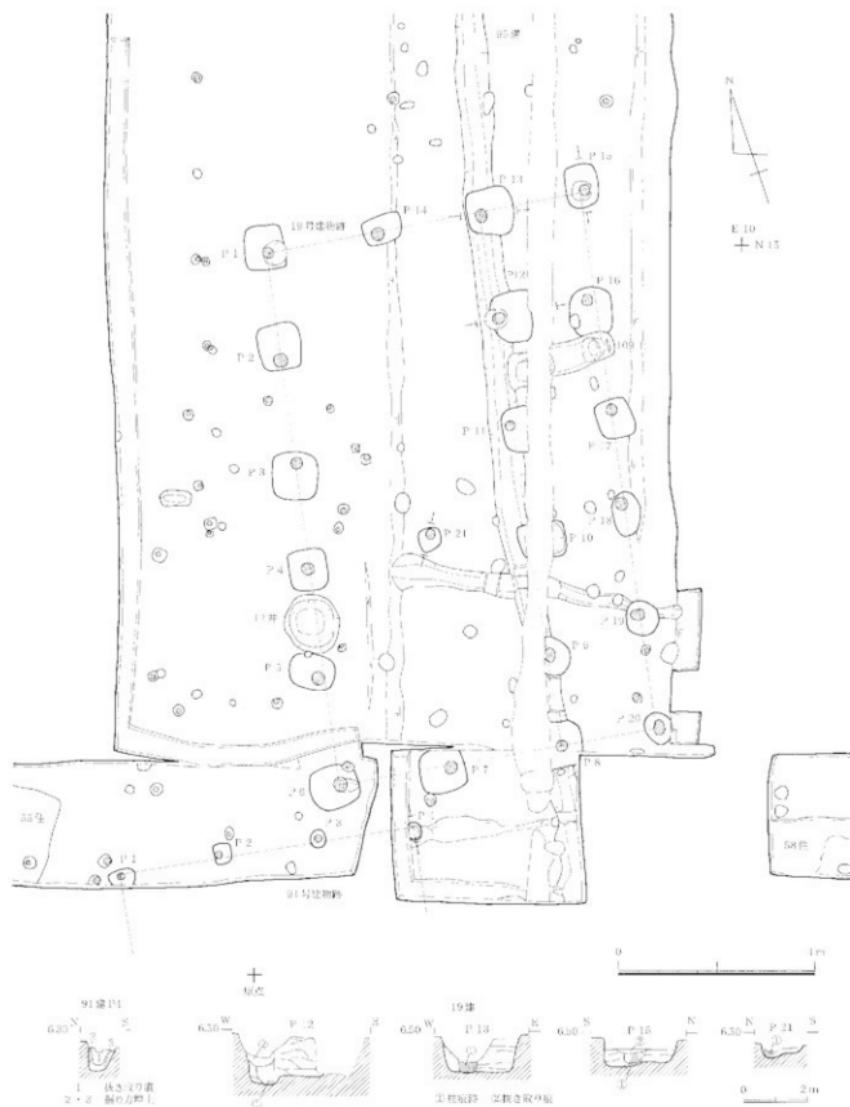
[確認面] II層。

[重複] なし。

[構造・方向] 東西棟、掘立式側柱建物跡。

発見 開社切り

III. 25~27区(第5、8次調査)で検出した構造と遺物



第10図 19号・91号建物跡

〔規模〕 柱行3間 (6.10m) 以上、梁行不明。

〔方位〕 E-10° - S (北側柱列)。

〔柱穴掘り方〕 平面形：円形～隅丸方形。規模：34～58cm、深さ35cm。埋土：地山粒・灰褐色土粒を含む黒色シルト質粘土～明黄褐色粘土。

〔柱抜き取り痕〕 1ヶ所で確認。

〔柱痕跡〕 規模：16～34cm、深さ：34cm。堆積層：黒色～黒褐色粘土質シルト。

〔出土遺物〕 遺物は出土していない。

116号建物跡

〔位置〕 E 0.5～3.5、S5.5～8.5付近。

〔調査区〕 2区、27区。

〔確認面〕 II層。

〔重複〕 なし。

〔構造・方向〕 南北棟、掘立式側柱建物跡。

〔規模〕 柱行1間(南側3.10m)、梁行1間(西側2.80m)。

〔方位〕 N-3° - W (西側柱列)。

〔延べ床面積〕 8.68m²。

〔柱穴掘り方〕 平面形：隅丸方形。規模：20～28cm、深さ15cm。埋土：地山粒を含む黒色粘土質シルト～褐灰色粘土。

〔柱痕跡〕 規模：10～20cm、深さ：15cm。堆積層：黒色粘土質シルト。

〔出土遺物〕 遺物は出土していない。

117号建物跡

〔位置〕 E 7、N54～59.5付近。

〔調査区〕 26区。

〔確認面〕 II層。

〔重複〕 なし。

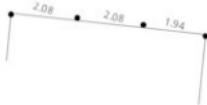
〔構造・方向〕 南北棟、掘立式側柱建物跡。

〔規模〕 柱行3間 (5.05m) 以上、梁行不明。

〔方位〕 N-17° - W。

〔柱穴掘り方〕 平面形：楕円形～隅丸方形。規模：20～28cm、深さ20cm。埋土：地山土を含む黒褐色シルト。

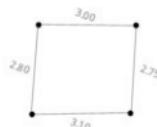
〔柱痕跡〕 3ヶ所。規模：15～23cm、深さ：15cm。



第11図 91号建物跡模式図

No	種別	規格、深さ(cm)	平面形
P 1	柱 穴	450L×38, 34	隅丸方形?
	柱 穴	15×20, 34	円形
P 2	柱 穴	36×42, 16	隅丸方形
	柱 穴	13×16, 16	円形
P 3	柱 穴	34×36, 23	円形
	柱 穴	17×19, 23	円形
P 4	柱 穴	276L×40, 35	隅丸方形
	柱 穴	256L×35, 28	円形

第6表 91号建物跡柱穴規模



第12図 116号建物跡模式図

No	種別	規格、深さ(cm)	平面形
P 1	柱 穴	25×25, 8	隅丸方形
	柱 穴	10×10, 8	円形
P 2	柱 穴	20×25, 15	楕円形
	柱 穴	10×11, 15	円形
P 3	柱 穴	25×28, 11	楕円形
	柱 穴	15×20, 13	円形
P 4	柱 穴	23×23, 8	隅丸方形
	柱 穴	15×18, 10	円形

第7表 116号建物跡柱穴規模

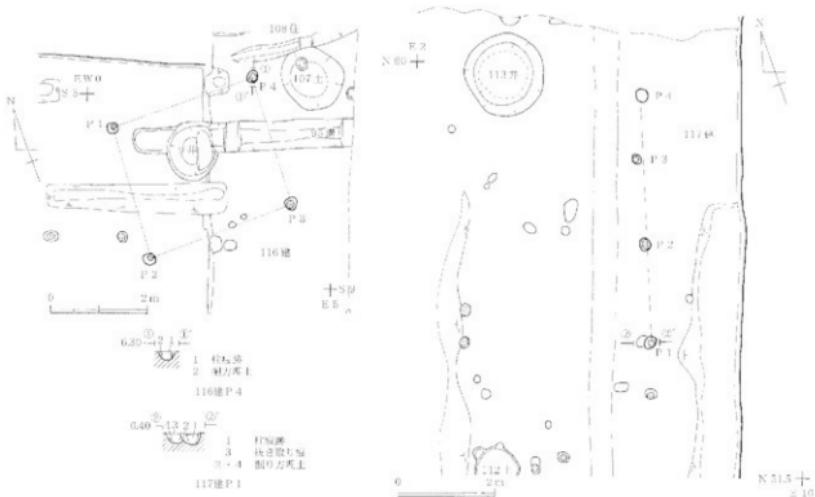


第13図 117号建物跡模式図

No	種別	規格、深さ(cm)	平面形
P 1	柱 穴	25×25, 8	隅丸方形
	柱 穴	10×10, 8	円形
P 2	柱 穴	20×25, 15	楕円形
	柱 穴	10×11, 15	円形
P 3	柱 穴	25×28, 11	楕円形
	柱 穴	15×20, 13	円形
P 4	柱 穴	23×23, 8	隅丸方形
	柱 穴	15×18, 10	円形

第8表 117号建物跡柱穴規模

III. 25~27区(第5、8次調査)で検出した造構と遺物



第14図 116号建物跡・117号建物跡

堆積層：地山粒を含む黒色粘土～黒褐色シルト。

〔出土遺物〕 遺物は出土していない。

(3) 井戸跡と出土遺物

11号井戸跡

〔位置〕 E2、S6付近。

〔調査区〕 3区、27区。

〔確認面〕 II層。

〔重複〕 95号溝跡→11号井戸跡

〔規模・平面形〕 南北1.18m、東西1.04m、

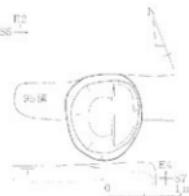
深さ0.32m。円形。

〔底〕 II層を底。ほぼ平坦。

〔壁〕 II層を壁。ほぼ垂直に立ち上がる

〔堆積層〕 大別2層。1層は人為堆積、2層は機能時で自然堆積。

〔出土遺物〕 上層より土師器甕破片が4点出土している。



第15図 11号井戸跡

102号井戸跡

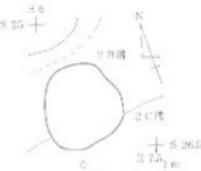
〔位置〕 E6.5、S26付近。

〔調査区〕 27区。

〔確認面〕 2号B、C溝跡堆積層。

〔重複〕 2BC号溝跡→102号井戸跡

〔規模・平面形〕 南北1.06m、東西0.96m。円形。



第16図 102号井戸跡

〔底〕掘り下げていないため不明。

〔壁〕掘り下げていないため不明。

〔堆積層〕焼土粒、炭化物粒、灰白色火山灰粒、地山粒を含む黒褐色粘土。

〔出土遺物〕2号溝跡の掘り下げ最終段階で確認したため出土遺物の有無は不明。

113号井戸跡

〔位置〕E3~4.5、N59~60.5付近。

〔調査区〕26区。

〔確認面〕II層。

〔重複〕なし。

〔規模〕南北1.70m、東西1.68m、

深さ0.56mまで確認。

〔底〕完掘を行わなかったので不明。

〔壁〕II層を壁とする。やや急に立ち上がる。

〔堆積層〕大別1層。自然。

〔出土遺物〕遺物は出土していない。

114号井戸跡

〔位置〕E3.5~N45付近。

〔調査区〕26区。

〔確認面〕111号溝跡上面。

〔重複〕111号溝跡→114号井戸跡。

〔規模〕南北1.05m、東西1.00m。深さ0.53mまで確認。

〔底〕完掘を行っていないので不明。

〔壁〕111号溝跡堆積層、II層を壁。垂直に立ち上がる。

〔堆積層〕大別1層。自然堆積。

〔出土遺物〕遺物は出土していない。

115号井戸跡

〔位置〕E4.5、N44.5付近。

〔調査区〕26区。

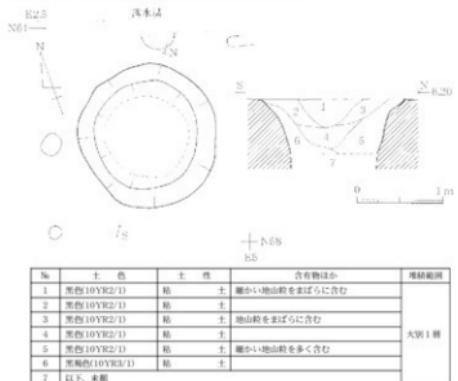
〔確認面〕II層。

〔重複〕115号井戸跡→111号溝跡。

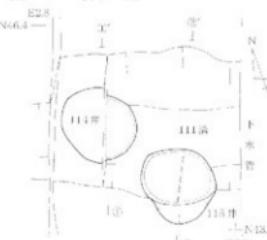
〔規模〕南北1.05m、東西1.06m、深さ0.65mまで確認。

〔底〕完掘を行っていないので不明。

〔壁〕II層を壁。垂直に立ち上がる。南側は崩落のため傾斜する。



第17図 113号井戸跡



第18図 114号・115号井戸跡・111号溝跡

III. 25~27区(第5、8次調査)で検出した遺構と遺物

〔堆積層〕 大別2層。自然堆積。層No.6以下は機能時の堆積層。

〔出土遺物〕 遺物は出土していない。

(4) 土坑と出土遺物

13号土坑

〔位置〕 E2、S41付近。

〔調査区〕 3区、27区。

〔確認面〕 II層。

〔重複〕 なし。

〔規模・平面形〕 東西0.72m、南北0.56m、深さ0.19m。隅丸長方形。

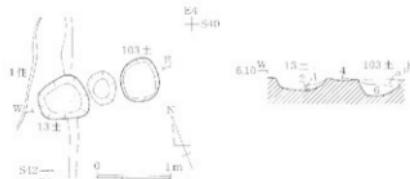
〔底〕 II層を底。皿状。底面は斑状に赤変する。

〔壁〕 II層を壁。急に立ち上がる。

壁は斑状に赤変する。

〔堆積層〕 大別2層。人為堆積と考えられる。

〔出土遺物〕 土師器甕破片が出土している。



第19図 13・103号土坑

種別	層別		石	合計
	Ⅰ	Ⅱ		
1	1	0	1	1
2	6	2	8	8
合計	7	2	9	9

第9表 13号土坑出土遺物集計表

103号土坑

〔位置〕 E3.5、S41付近。

〔調査区〕 27区。

〔確認面〕 II層。

〔重複〕 なし。

〔規模・平面形〕 南北0.64m、東西0.54m、深さ0.23m。隅丸方形。

〔底〕 II層を底。ほぼ平坦。

〔堆積層〕 焼土、炭化物を含む。人為堆積。

〔出土遺物〕 土師器、須恵器、赤焼き土器などが出土している。

〔壁〕 II層を壁。急に立ち上がる。

層別	種別		石	合計
	H	W		
Ⅰ	3	6	1	1
Ⅱ	0	3	0	0
合計	3	9	1	12

第10表 103号土坑出土遺物集計表

105号土坑

〔位置〕 S9.5、E6付近。

〔調査区〕 27区。

〔確認面〕 II層。

〔重複〕 106号土坑→搅乱

〔規模・平面形〕 南北0.79m、東西0.68m、深さ

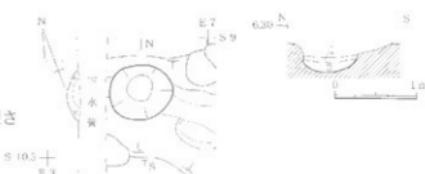
0.19m。円形。

〔底〕 II層を底。皿状。

〔壁〕 II層を壁。垂直に立ち上がる。

〔堆積層〕 大別1層。自然。

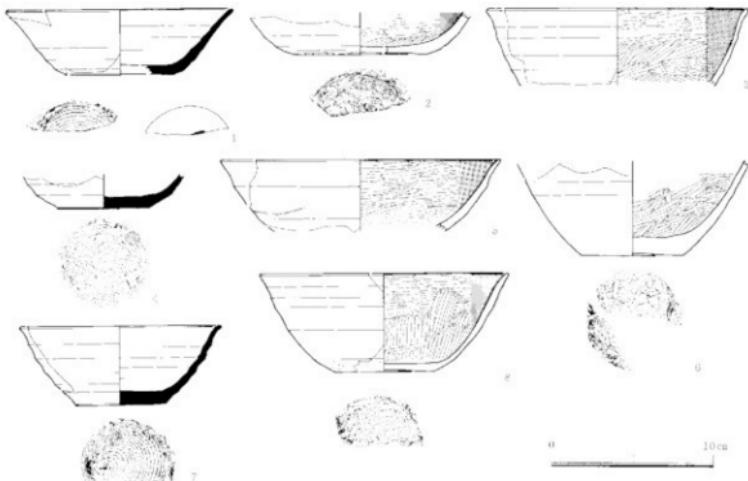
〔出土遺物〕 土師器甕破片が1点出土している。



層別	種別		石	合計
	H	W		
Ⅰ	6.20	6.20	0	0
Ⅱ	0	0	0	0

第20図 105号土坑

III-2. 検出した遺構と遺物



No.	部位	遺物名	出幅	残存	断面	口径	底径	特	基盤	壁厚
1	堆積層・2階	瓦 瓦器	坪	底盤	4.3	14.0	6.8	丸の形叶子、瓦の(103B6)～(103B7)は輪郭線あり、裏面丸、内:103B6アザ、底盤:(103B6)～(103B7)～(103B8)	R293	—
2	堆積層	土 膜 壁	坪	底	—	—	8.0	丸の形叶子、輪郭線あり、裏面丸の形叶子あり、瓦の(103B6)～(103B7)、内:103B6～103B7は輪郭線あり、裏面	R293	—
3	2 階	瓦 瓦器	坪	口～底部	—	16.2	—	丸の形叶子、瓦の(103B6)～(103B7)は輪郭線あり、裏面丸の形叶子あり、瓦の(103B6)～(103B7)	R292	—
4	堆積層	瓦 瓦器	坪	底盤	—	—	5.8	丸の形叶子、瓦の(103B6)～(103B7)は輪郭線あり、裏面丸の形叶子あり、瓦の(103B6)～(103B7)	R293	—
5	堆積層	土 膜 壁	坪	口～底部	—	17.4	—	丸の形叶子、瓦の(103B6)～(103B7)は輪郭線あり、裏面丸の形叶子あり、瓦の(103B6)～(103B7)	R294	—
6	堆積層	土 膜 壁	坪?	底～下層	—	—	6.2	丸の形叶子、瓦の(103B6)～(103B7)は輪郭線あり、裏面丸の形叶子あり、瓦の(103B6)～(103B7)	R292	8-1
7	堆積層・2階	瓦 瓦器	坪?	2/5	4.9	12.6	5.1	丸の形叶子、底:(103B6)～(103B7)は輪郭線あり、裏面:(103B6)～(103B7)	R290	8-2
8	堆積層	土 膜 壁	坪	1/2	6.1	15.4	6.2	丸の形叶子、瓦の(103B6)～(103B7)は輪郭線あり、裏面:(103B6)～(103B7)	R264	8-3

第21図 103号土坑出土遺物

106号土坑

【位置】E7.5、S5.5付近。

【調査区】27区。

【確認面】95号溝跡堆積層上面。

【重複】95号溝跡→106号土坑

【規模・平面形】南北0.55m、東西0.25m以上、

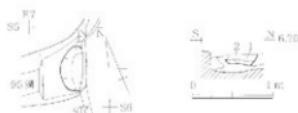
深さ0.25m。隅丸方形と考えられる。

【底】95号溝跡堆積層を底。ほぼ平坦。

【壁】95号溝跡堆積層を壁。急に立ち上がる。

【堆積層】大別1層。自然。

【出土遺物】遺物は出土していない。



III. 25~27区(第5、8次調査)で検出した遺構と遺物

[規模・平面形] 南北1.30m、東西1.27m、深さ0.15m。楕円形。

[底] II層を底。皿状。

[壁] II層、108号住居跡堆積層を壁。ゆるやかに立ち上がる。

[堆積層] 1層。自然。

[出土遺物] 遺物は出土していない。

109号土坑

[位置] E5~7.5、N12~13付近。

[調査区] 26区。

[確認面] II層、19建物跡柱穴上面。

[重複] 19号建物跡→109号土坑→95号溝跡

[規模・平面形] 南北0.70m、東西2.29m、深さ0.32m。隅丸長方形。

[底] II層を底。段状。

[壁] II層などを壁。長辺ではやや急に立ち上がる。短辺では垂直に立ち上がり、一部でオーバーハングする。

[堆積層] 大別2層。1層は自然、2層は人為堆積と考えられる。

[出土遺物] 1層より土師器、須恵器、土壁が出土している。

112号土坑

[位置] E4、N51.5付近。

[調査区] 26区。

[確認面] II層。

[重複] ピットと重複するが新旧関係は不明である。

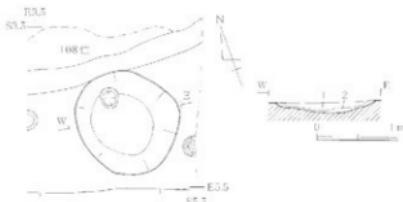
[規模・平面形] 南北0.82m、東西0.82m、深さ0.32m。北隅が一部張り出すが隅丸方形。

[底] II層を底。平坦。

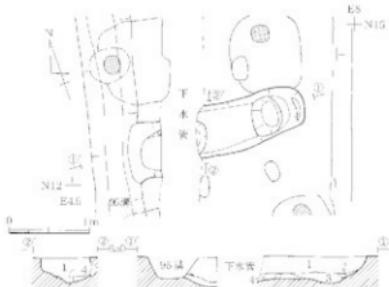
[壁] II層を壁。垂直に立ち上がる。

[堆積層] 大別2層。自然。

[出土遺物] 遺物は出土していない。



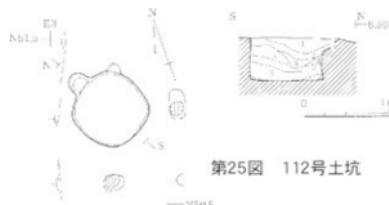
第23図 107号土坑



第24図 109号土坑

種別	土色	土性	含有物ほか		堆積範囲
			層	層	
1	黒褐色(10YR3/1)	粘	土	地山土をまざらに含む	大別1層
2	灰褐色(10YR4/2)	粘	土	地山ブロック、地山粒をまざらに含む	

第11表 109号土坑出土遺物集計表



第25図 112号土坑

種別	土色	土性	含有物ほか		堆積範囲
			層	層	
1	黒褐色(10YR3/1)	粘	土	地山土をまざらに含む	
2	黒褐色(10YR2/1)	粘	土	地山土をまざらに含む	大別1層
3	黒褐色(10YR2/1)	粘	土	地山土をまざらに含む	
4	黒褐色(10YR2/1)	粘	土	地山土をまざらに含む	
5	黒褐色(10YR3/1)	粘	土	地山土をまざらに含む	大別2層
6	黒褐色(10YR2/1)	粘	土	地山土をまざらに含む	
7	灰褐色(10YR5/2)	粘	土	地山土をまざらに含む	

(5) 溝跡と出土遺物

2号溝跡

[位置] W3.5~E8、S23.5~35付近。 [調査区] 3区、27区。

[確認面] II層。

[重複] 2号溝跡→15号土坑、102号井戸跡 [方向] N-77° - E。

[規模] 3区及び27区で総長13m確認。1次調査30、45T、3次調査15区でも確認し、総長120m以上である。27区では面工事を受ける部分について上層約30cm分のみの掘り下げを行なった。

[B号溝跡] 上幅：4.70m、下幅：0.65m、深さ：1.4m。底：II層で平坦。壁：II層、2A号溝跡堆積層でやや急に立ち上がり途中で屈曲しゆるやかに立ち上がる。堆積層：黒褐色粘土、黒色粘土で灰白色火山灰（2次堆積）が帶状に堆積する。自然堆積。

[C号溝跡] 上幅：3.5m、下幅：0.55m、深さ0.7m、底：2B号溝跡堆積層、ほぼ平坦。壁：2B号溝跡堆積層で急に立ち上がり途中で屈曲しゆるやかに立ち上がる。堆積層：黒色粘土で炭化物が多く、鉄滓を含む。

[出土遺物] 堆積層より縄文土器、土師器、須恵器、赤焼き土器、中世陶器、土師質土器、土製品、鉄滓など出土した。

層別	土 色							測定部			赤褐色			赤褐色土器			鉄石			鉄製品			縄文土器			近現代			粘土塊			土製品			石			合計		
	黒	灰	褐色	黄褐色	黄	不明	黒	灰	褐色	黒	灰	褐色	黒	灰	褐色	黒	灰	褐色	黒	灰	褐色	黒	灰	褐色	黒	灰	褐色	黒	灰	褐色	黒	灰	褐色	黒	灰	褐色				
堆積層	132	25	4	8	1	181	45	2	11	0	14	0	2	15	0	0	0	6	4	13	483																			
C堆積層	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	25							
晶下層	4	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0							
1-	2	1	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	7							
灰色より上	1	0	0	0	0	0	3	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	5							
灰色より下	4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0							
検出面	4	1	0	0	0	0	10	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	19							
合計	167	27	4	8	1	197	48	2	11	1	15	1	2	39	1	1	6	4	14	549																				

第12表 2号溝跡出土遺物集計表（2次調査含む）

7号溝跡

[位置] W2.5~E3.5、N39~41.5付近。

[調査区] 2区、26区。

[確認面] II層。

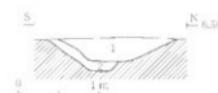
[重複] 7A号溝跡→7B号溝跡→116号土坑

[方向] N-10° - E。

[規模] 総長11.1m確認。

[A号溝跡] 上幅：不明、下幅：30~45cm、深さ：14~35cm。底は平坦で急に立ち上がる。東から西に傾斜する。堆積層：地山粒を多く含む黒褐色粘土。

[B号溝跡] 上幅：1.45~1.65m、下幅：48~80cm、深さ：14~25cm。底は平坦で急に立ち上がる。堆積層：地山粒を若干含む黒褐色粘土。



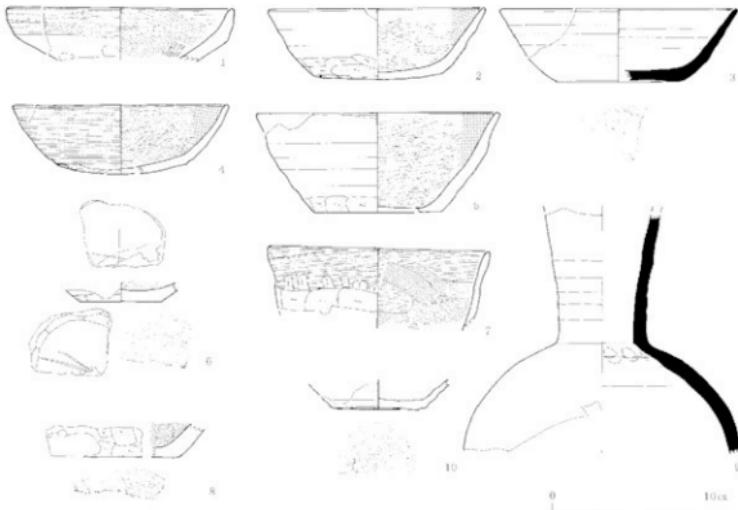
No	土色	土性	含有物は	堆積範囲
1	黒褐色(10YR3/1)	シルト質粘土	細かい地山粒を若干含む	A堆積層
2	2 黒褐色(2.5YR3/1)	粘	細かい地山粒を多く含む	B堆積層

第26図 7号溝跡断面

層別	土種別	地質	中世	粘板岩	鐵石	石	合計
堆積層	2	3	1	1	0	1	9
A堆積層	0	0	1	0	1	0	3
合計	2	3	2	2	1	1	12

第13表 7号溝跡出土遺物集計表

III. 25~27区(第5、8次調査)で検出した造構と遺物



%	部位	遺物名	形種	残存	基高	口径	底径	特徴	登錄	回数
1	堆積層	土師器	环	～全体	—	14.0	—	外：縦カナヘキ、無調節、灰陶 (10YR4/1), 内：ハバメー様カナヘキ、灰陶 (10YR4/2)～灰陶 (12YR7/2)	R272	8-10
2	堆積層	土師器	环	2/5	4.4	13.6	8.2	内：ロクロナギ、手持ちヘタケリ、環 (12YR4/2)～灰陶 (10YR7/2), 环：手持ちヘタケリ、内：ロクロナギ～手持ちヘタケリ、黑 (ON2.1)	R268	8-7
3	堆積層	灰陶	环	1/3	4.6	14.6	7.8	ロクロナギ、灰陶 (2.5Y6/1-5/1), 回転系切り、内：ロクロナギ	R267	—
4	堆積層	土師器	环	3/5	—	13.2	8.0	外：縦カナヘキ (2.5Y6/1-5/1)～灰陶 (2.5Y6/2)	R273	—
5	堆積層	土師器	环	1/3	—	15.0	7.8	外：ロクロナギ、底付近を手持ちヘタケリ、灰陶 (10YR6/2), 环：手持ちヘタケリ再調節、灰陶 (2.5Y6/1-5/1)～灰陶 (2.5Y6/2)	R220	—
6	堆積層	土師器	环	底部	—	5.1	—	外：ロクロナギ、手持ちヘタケリ、底 (10YR8/2), 底：回転系切りの後、フタ記印 (完成前), 内：ミガキ・黒處理、黑 (ON2.1)	R291	—
7	堆積層	土師器	環	～全体	—	13.8	—	外：縦カナヘキ、底付近～灰陶 (10YR3/2), 内：骨子、灰陶 (10YR3/2)～C-S接合 (10YR3/1)	R269	—
8	堆積層	土師器	實小鉢	底部	—	—	—	外：ヘタケリ、内：ハバメー (GYR5/4), 环：網代瓶、内：ミガキ・黒處理、黒陶 (10YR3/1)	R265	8-9
9	堆積層	土師器	長頸壺	～全体	—	—	—	外：ロクロナギ、黒 (ON2.1)～灰陶 (ON7.1), 内：ロクロナギ、二段接合、灰 (GY3/1)	R274	8-6
10	堆積層	土質土器	环	底～半周	—	5.0	—	外：ロクロナギ、灰陶 (10YR5/5), 环：網代瓶～灰陶 (10YR6/0)～灰陶 (10YR5/2)	R271	—

第27図 2号溝跡出土遺物

95号溝跡

[位 置] E1 ~ 8, S6 ~ N35付近。

[調査区] 3区、25、26、27区。

[確認面] II層。

[重 複] 19号建物・109号土坑→95号溝跡→11号井戸跡・106号土坑

[方 向] N-10~13° - E。

[規 模] 総長48.2m確認。南辺で7mのび、東側で北

にはほぼ直角に曲がり41m以上延びる。幅0.5~0.8m以

上、深さ0.13~0.32m。

[底] II層などを壁。ほぼ平坦。

[壁] II層などを底。やや急に立ち上がる。

[堆積層] 黒色粘土。自然堆積。

[出土遺物] 遺物は繩文土器、土師器、須恵器、赤焼き土器、中世陶器、鉄滓が出土した。



%	土 色	土 性	含む物等	堆積範囲
1	実褐色 (10YR2/2)	粘	土	細かい地山削を多く含む 大崩1層
2	実褐色 (10YR3/1)	粘	土	—
3	黑色 (10YR1/1)	粘	土	細かい地山削を少しばらに含む 大崩1層

第28図 95号溝跡断面



No.	地区・層位	遺物名	形態	残存	表面	寸法	基準	特　　徴	号録	図版
1	9.5溝・1層	中世陶器	甕	底盤	—	—	—	外：楕円形、底：平底、表面整型、灰陶。GYR5/2b、内：楕円ナデ。GJYR5/4	R279	—
2	9.5溝堆積層	中世陶器	甕	底盤	—	—	—	外：楕円形のナデ、楕円軸の押出、黒陶。(7.5YR3/1)、内：楕円ナデ、黒陶。(7.5YR3/1)、底：灰陶。	R277	—
3	9.5溝堆出土面	中世陶器	細鉢	底盤	—	—	—	外：楕円ナデ、ケズリ、に凹・窓陶。(GYR5/4)、内：楕円ナデ、下部は使用により摩滅跡、底：(GYR5/3)～灰陶。(5.5YR5/2)	R276	—
4	3溝堆・1層	中世陶器	甕	底盤	—	—	—	外：楕円形のナデ、腹.(7.5YR4/3)、内：自然形、灰陶(10YR4/2)、使用による摩滅跡。	R237	—
5	7溝堆・1層	石質品	搬持?	—	—	—	—	残存：上層丸び下層尖端、表面に複数の擦痕跡多く、削り目有、横断面柱状、底面をタマキ、上面をツキ、ケズリ、長さ：(9.2)、幅：(5.3)、厚さ：(1.7)、色調：表面は鮮紅。(5G6/1)～暗紅。(5S1/1)、裏面はオーラー灰。(2.5G6/1)～灰オリーブ	R282	8-15
6	7B溝堆・1層	石質品	石壁?	残存	一面欠損、2面使用で1面に黑色物質付着	長さ：(16.7)、幅：(8.9)、厚さ：(0.9)	—	—	R284	—

第29図 溝跡出土遺物

III. 25~27区(第5、8次調査)で検出した遺構と遺物

種別 部位	千	百	十	個	件	堆積	形態		中世陶器		和洋 材質	鉄洋 材質	粘土 塊	石	合計
							鉢	碗	壺	不規	杯	瓶	甕	罐	
施作部	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2
3	施作部	4	7	0	19	1	1	1	2	0	0	1	3	1	40
2	施作部	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1
堆積層	7	11	1	18	2	1	3	3	0	2	5	0	9	62	
合計	13	18	1	37	3	2	4	5	1	2	6	3	10	105	

111号溝跡

第14表 95号溝跡出土遺物集計表

[位 置] E2~8、N44~46付近。

[確認面] II層。

[重 複] 115号井戸跡→111号溝跡→114号井戸跡 [方 向] E-20°-S。

[規 模] 総長5.86m確認。幅1.56~2.14m、深さ0.10~0.28m。

[底 底] II層などを底。ほぼ平坦。

[壁 壁] II層などを底。ゆるやかに立ち上がる。

[堆積層] 黒褐色シルト。自然堆積。

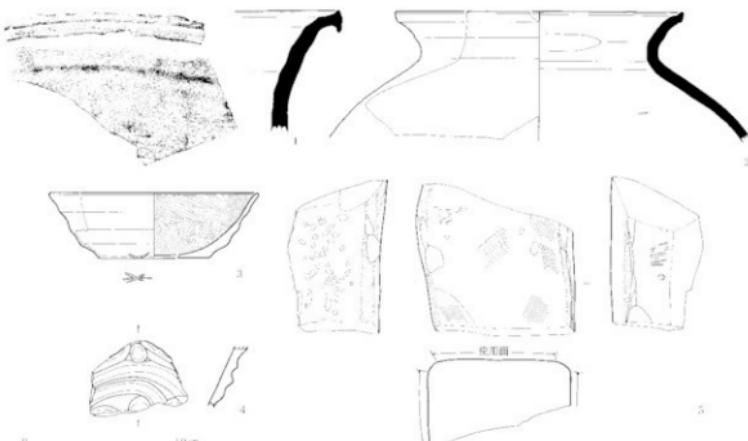
[出土遺物] 摩滅した土師器が1点出土した。

(6) その他の遺構、表土遺物

基本層やピットなどから縄文土器、土師器、赤焼き土器、須恵器、中世陶器、鉄製品が出土した。点数は第15表に示し、実測可能なものについて図示する。

種別 部位	千	百	十	個	件	形態		中世陶器		近現代 陶器類	鉄製品	粘土塊	路頭	合計	
						鉢	碗	壺	不規	杯	瓶	甕	罐		
施作部	下	0	0	6	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4	19
施作部	中	0	11	5	0	23	1	2	0	2	1	0	0	0	96
施作部	上	0	3	2	2	7	1	1	0	0	0	1	0	1	28
表土	下	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	2
表土	中	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
表土の落ち	0	0	5	2	0	7	0	2	0	0	1	0	0	0	17
表土の落ち(此)	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1
表土	上	0	4	5	0	5	1	1	0	0	0	0	0	0	19
表土の落ち	上	0	3	2	0	9	2	0	0	0	0	0	0	0	5
表土の落ち	中	0	1	7	0	7	0	2	0	0	0	0	1	1	18
278北正直地土器	0	0	1	2	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	8
施作部	中	0	2	1	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	2
不	明	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1
合計	2	1	41	22	2	67	6	16	0	3	3	1	2	4	271

第15表 表土・遺構外出土遺物集計表



地区・部位	遺物名	形態	現存	過去	口径	底径	特徴		現存	過去	現存	過去
							外	内				
1 表土	表 地 使 貝	貝	1口部	—	—	—	外:手行タタキ→ロクロテグ、内:ロクロナガテ、黄灰 (10YR4/4)	—	R296	—	—	—
2 278北正直地土器	土 壁 壺	壺	—	—	17.8	—	外:ロクロナガテ、内:ロクロナガテ (SY5/1)、西:ロクロナガテ、内:SY5/2	—	R280	—	—	—
3 254E・1 壺	土 壁 壺	壺	—	—	1.2	4.1	13.0	9.0	—	—	—	—
4 278E54地土器	表 地 使 貝	貝	1口部	—	—	—	文政:沈底、直壁、外:三手牛、黑施 (10YR3/3)、内:底施、輪郭 (10YR3/3)	—	R295	—	—	—
5 表 地 使 品	石 石 壁 壺	壺	上部膨らみ部、背面欠損、底さ 19.5、幅 1.5~3.0、厚さ 5.4~8.0、3面削用で細かい擦痕見られる	—	—	—	—	—	R296	—	—	—

第30図 表土・遺構外出土遺物

遺構名	位 調	構造・特徴	規 格 (単位)	柱 高 (m)	方 向	備 考
19號	2・12・ 25・26E	東側付面北壁 相引門 (1.08) 梁77.7間 (4.63) 梁1間 (2.20)	東側 南側 北側	2.25+2.15+2.20+2.25+2.23 (北から) 2.31+2.32 (南から) 2.20	N12° E	19號→12井、14号、95溝、109 土、開仕切りあり
91號	12・25E	東西壁 相引2間以上 (6.10)	北側	(4+) 2.08+2.08+1.94 (西から)	E10° S	
116號	3・27E	東西壁 相引1間 (2.80)	南側 西側	3.10 2.80	N3° E	
117號	27E	南北壁 相引3間 (5.00)		2.05+1.75+1.25 (南から)	N16° E	

据立柱建物跡

遺構名	位 調	平面形	断面形	長軸	短軸	深さ	堆 積 層	備 考
11井	27E	円 形	扇 形	1.18	1.04	1.18	池山土・洪化物、土質を含む黒褐色シルト～粘土質シルト (人為)、 黒褐色土質シルト～黒褐色土 (自然堆積)	95溝→11井
102井	27E	円 形	一	1.06	0.96	—	黑色粘土 (自然堆積)	20E溝→102井
113井	26E	円 形	扇 形	1.70	1.67	0.562±上	離かし土・地山を含む黒褐色土 (自然)	
114井	26E	円 形	扇 形	1.05	1.00	0.536±上	黑色シルト質粘土～黒褐色シルト質粘土 (自然堆積)	111井→114井
115井	26E	円 形	扇 形	1.06	1.05	0.654±上	黑色シルト～黒褐色土・黒褐色土質シルト (自然堆積)	115井→111井

井戸跡

遺構名	位 調	平面形	断面形	長軸	短軸	深さ	堆 積 層	備 考
13井	3・27E	楕 丸 形	扇 台 形	0.72	0.56	0.19	地山土・洪化物・幾つかの柱の埋設色 (うち)、柱と柱を含む黑色シルト (人為)、 黒褐色土質シルト～黒褐色土 (自然)	土師器
101井	27E	楕 丸 形	扇 台 形	0.72	0.65	0.08	地山土・洪化物を含む黒褐色シルト～地山土を含む黑色シルト (自然)	土師器
103井	27E	楕 丸 形	U 形	0.64	0.54	0.23	地山土・洪化物を含む多孔質質色シルト～地山土を含む黑色シルト (人為)	土師器・泥敷器・赤絞き土器
105井	27E	円 形	和 形	0.79	0.68	0.19	地山土・洪化物を含む圓筒形 (質色)～地山土を含む黑色粘土 (自然)	土師器
106井	27E	楕 丸 形	和 形	0.55	0.25	0.25	地山土・地山土を含む黒褐色粘土～黑色シルト質粘土 (自然)	95溝→106井
107井	27E	楕 丸 形	扇 台 形	1.20	1.27	0.15	黒褐色土～灰褐色色 (自然)	100井→107井→ピット
109井	26E	楕 丸 形	U 形	0.22	0.70	0.32	黑色粘土 (自然)、細砂などを含む黒褐色土 (人為)	199井→109井→95溝
112井	26E	楕 丸 形	U 形	0.82	0.82	0.53	黒褐色土～灰褐色色粘土 (自然)	

土 坑

遺構名	位 調	平面形	断面形	上幅	下幅	深さ	方 向	堆 積 層	備 考
28溝	30・45T, 3・27・ 15E	120KL上	U状	4.70	0.65	1.40	東西	黒～黒褐色粘土 (自然)	灰白色火山灰む、古代
2C溝	3・27E	13.0	U状	3.50	0.15	0.70	東西	黒褐色土、洪化物含む (自然)	2C溝→102井、中世
3溝	3・27E	13.2	U	0.95	0.50	0.35	東西で北 に曲がる	地山土を含む黒色～黒褐色シルト (自然)	4溝→3溝、古代の遺物出土
4溝	3・27E	11.0	狭状	0.85	0.55	0.10	東西	地山土を含む黒褐色シルト	4溝→3溝、土師器・鐵矛
5溝	3・27E	10.2	U型溝狀	0.91	0.15	0.14	南北	地山土を含む黒褐色シルト	5溝→20井、土師器、泥敷器
6溝	3・27E	6.4	L状	1.18	0.60	0.11	南北	地山土を含む黒褐色シルト	
7A溝	2・26E	11.1	U状	—	0.45	0.30	東西	地山土を多く含む黒褐色粘土	7A溝→7B溝、土師器、泥敷器、中世 陶器、磁器瓶、瓦石
7B溝	2・26E	11.5	U状	1.65	0.80	0.25	東西	地山土を含む黒褐色粘土	
9溝	3・25・ 26・27E	48.2	逆台形	0.75	0.38	0.32	南北で東 に曲がる	地山土を含む黒褐色粘土～灰色粘土	19井、109井、ピット→95溝→106井、 11井、溝、中世陶器
110溝	26E	5.9	段状	1.14	0.40	0.11	東西	地山土・洪化物をまばらに含む黒褐色粘土質シルト	土師器、泥敷器
111溝	26E	5.8	直状	2.14	0.80	0.28	東西	地山土をまばらに含む黒褐色粘土質シルト	115井→111溝→114井

溝 跡

第16表 検出遺構属性表

IV. 28区（第6次調査）で検出した遺構と遺物

28区は削平の影響もあるが、遺構の分布はまばらである。周辺で行った16～21区も同様である。

1. 基本層序

調査区内は面工事による削平で既にⅡ層や遺構と思われる黒色土の落ち込みが露出している状況であった。調査区西側の農道付近で以下のような基本層を確認した。

基本層序Ⅰ層 黒褐色（10YR3/1）～黒色（10YR1.7/1）粘土でしまりはあまりなく、粘性はある。

基本層序Ⅱ層 明黄褐色（10YR6/6）粘土～砂で、しまりがあり、かたい。本調査区内での地山である。また、部分的に漸移層とみられる暗褐色（10YR3/3）粘土質シルトを確認した。

なお、農道付近ではⅠ層上に道路盛土がされている。

2. 検出した遺構と遺物

検出した遺構は建物跡1棟、塙跡1条、土坑3基、溝跡2条、ピット12基である。いずれも検出のみだが、一部で掘り下げを行っている。

（1）建物跡と出土遺物

97号建物跡

〔位置〕 N8.5～12、E156.5～159付近。

〔調査区〕 28区。

〔確認面〕 Ⅱ層。

〔重複〕 なし。

〔規模〕 柱行1間、梁行1間。

〔方位〕 N-19° - E (西側柱列)。

〔延べ床面積〕 9m²。

〔構造・方向〕 南北棟、掘立式側柱建物跡。

	平面	規模	深さ	備考
P 1	楕丸方形	30×34	-	抜き取りあり
P 2	円 形	34×38	25	抜き取りあり、壁14、深さ35の柱窟跡
P 3	楕丸方形	25×30	-	抜き取りあり
P 4	楕丸方形	40×28	-	抜き取りあり

第17表 97号建物跡柱穴規模

〔柱穴掘り方〕 平面形：楕丸方形～円形。規模：

25～40cm、深さ25cm。埋土：地山土を含む黒

色シルト質粘土～灰黄褐色粘土。人為。

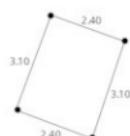
〔柱抜き取り痕〕 4ヶ所で確認。

〔柱痕跡〕 1ヶ所で確認。規模：14cm。深さ：30cm。

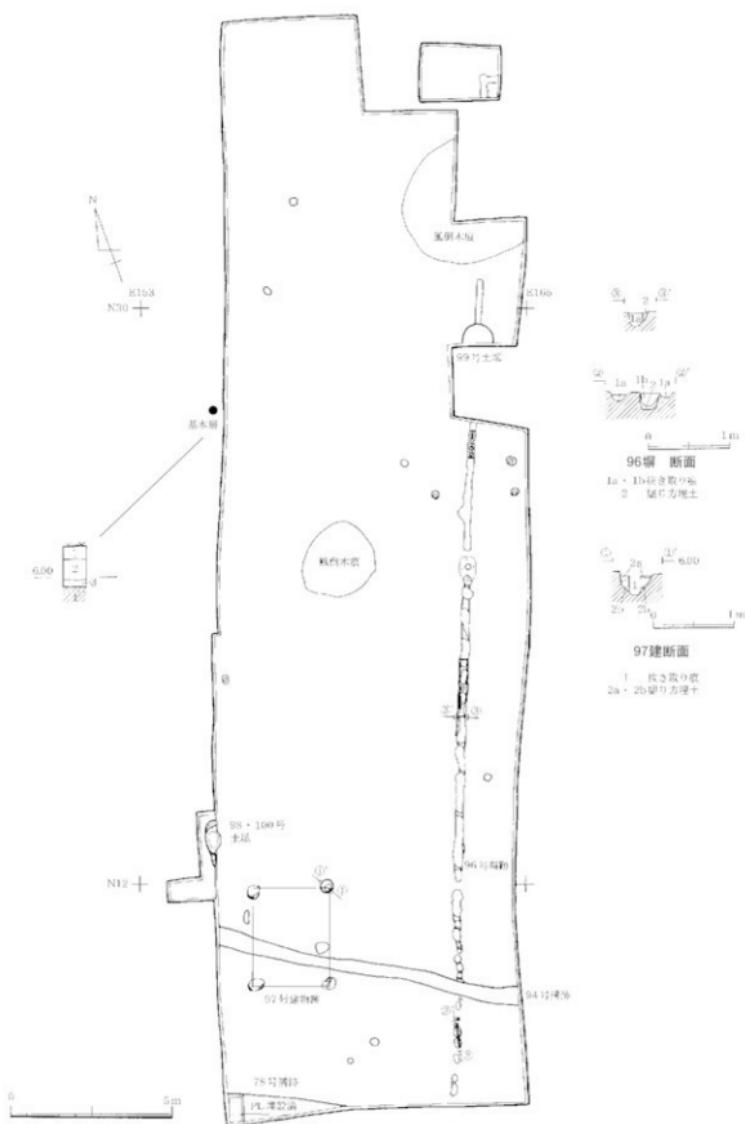
堆積層：黒色～黒褐色粘土質シルト。抜き取りのため

正確な形態は不明。

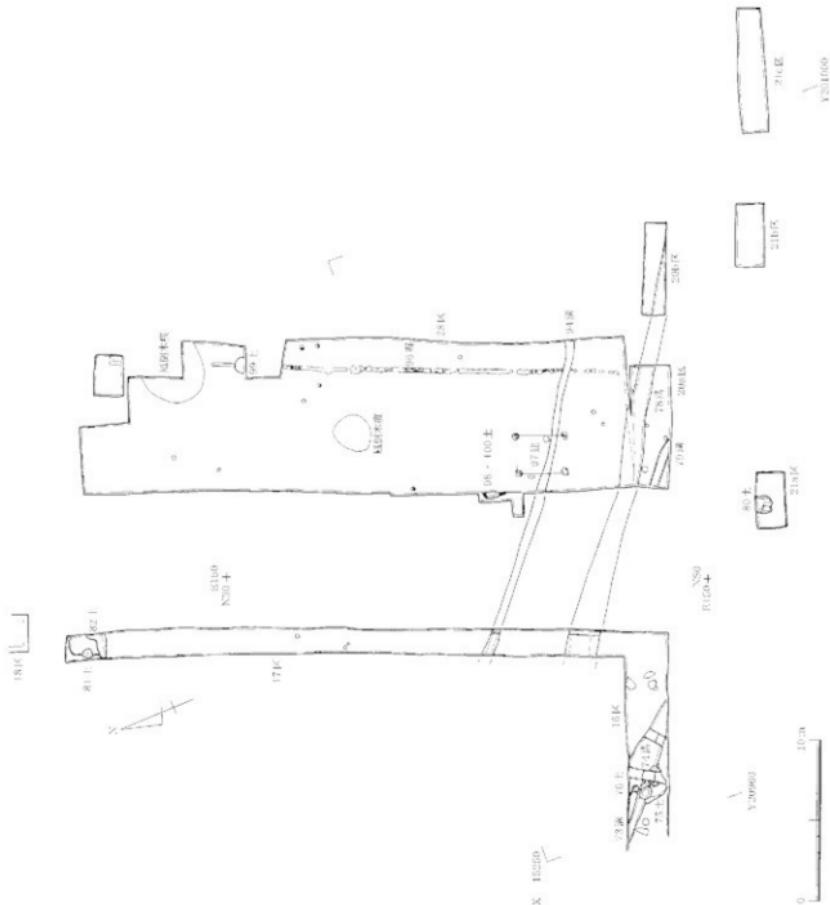
〔出土遺物〕 P 3抜き取り痕より土師器鉢が1点出土。



第31図 97号建物跡模式図



第32図 28区平面図



第33図 28区と周辺の調査区

(2) 墓跡と出土遺物

96号墓跡

〔位置〕 N5.5~38、E163付近。

〔調査区〕 28区。

〔確認面〕 II層。

〔重複〕 96号墓跡→94号溝跡

〔構造〕 南北方向に約32.5m延び、北で東に90°曲がり、0.5m以上延びる。

〔方位〕 N-20°-E。

〔掘り方〕 断面形：U字形。規模：10~27cm、深さ4~14cm。埋土：地山粒・灰褐色土粒を含む黑色シルト質粘土。

〔柱痕跡〕 抜き取り痕を確認した。北側では帯状に抜き取られる。南側では個別に抜き取られているが、上面が削平されたためと考えられる。規模：11~22cmの梢円形。深さ：不明。堆積層：黒色シルト質粘土。抜き取られたため正確な形態は不明。

〔出土遺物〕 土師器甕・須恵器壺が出土している。

(3) 土坑と出土遺物

98号土坑

〔位置〕 N13~14、N155付近。

〔確認面〕 II層。

〔重複〕 100号土坑→98号土坑

〔規模・平面形〕 南北0.84m、深さ0.32m。梢円形か。

〔底〕 II層を底。皿状。

〔壁〕 100号土坑堆積層、II層を壁。急に立ち上がる。

〔堆積層〕 1層。自然。

〔出土遺物〕 遺物は出土していない。

99号土坑

〔位置〕 N29、E163~164付近。

〔確認面〕 II層。

〔重複〕 96号墓跡→99号土坑

〔規模・平面形〕 南北0.58m以上、東西0.97m。円形か。

〔底〕 掘り下げを実施しておらず不明。

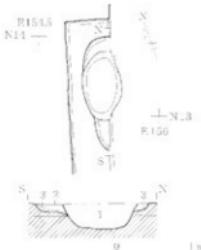
〔壁〕 掘り下げを実施しておらず不明。

〔堆積層〕 1層。黒色シルト。焼土・炭化物粒を含む。

〔出土遺物〕 検出面より土師器などが出土した。

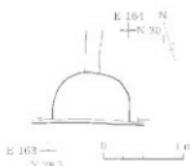
剖面	種別	土細目			含有物
		重	無	N	
抜き取り部		0	2	1	
検出面		1	0	0	

第18表 96号墓跡出土遺物集計表



No.	土色	土性	含有物等	堆積範囲
1	黒色 (IOYRL7/1)	粘	細かい地山粒をまばらに含む	98号土坑
2	黒色 (IOYR2/1)	粘	地山ブロックを多く含む、火入	
3	黒色 (IOYRL7/1)	粘	地山粒をまばらに含む、自然	100号土坑

第34図 98・100号土坑



第35図 99号土坑

剖面	種別	土細目			含有物
		重	無	N	
検出面		2	2	2	

第19表 99号土坑出土遺物集計表

100号土坑

〔位置〕 N12.5～14、E155付近。

〔確認面〕 II層。

〔重複〕 100号土坑→98号土坑

〔規模・平面形〕 南北1.40m、深さ0.12m。長楕円形。

〔底〕 II層を底。ほぼ平坦。

〔壁〕 II層を壁。やや急に立ち上がる

〔堆積層〕 大別2層。上層は人為、下層は自然。

〔出土遺物〕 遺物は出土していない。

(4) 基本層序出土遺物

基本層序が既に削平を受けていたことから、土師器が8点のみと少ない。また、細片のため、図示できなかった。

第20表 基本層序出土遺物集計表

遺構名	位 深	構造・特徴	規 模	柱間 (m)	方 向	備 考
97号	28E	南北縦	単行1間 (3.1) 梁行1間 (2.6)	西側 北側	3.1 2.8	N19° E 96層と方向同じ

建 物

遺構名	位 深	構造・特徴	規 模	方 向	備 考
96号	28	繋式	南北に32.5m以上。北で東に96°曲がり0.5m以上	N20° E	古代。抜き版あり。96溝、99土より古い

塙 跡

遺構名	位 深	平面形	断面形	長軸	短軸	深さ	堆 積 層	備 考
98土	28	楕円	箱	0.84	—	0.32	難かしい山形を若干含む黒褐色粘土。自然	100土より新
99土	28	円	箱	—	0.97	0.682上	—	地山土。炭化物。筒土を多く含む黑色粘土。96土より新
100土	28	長楕円	箱	1.4	—	0.12	上層は黒褐色粘土による人馬。下層は黑色粘土で自然	98土より古

土 坑

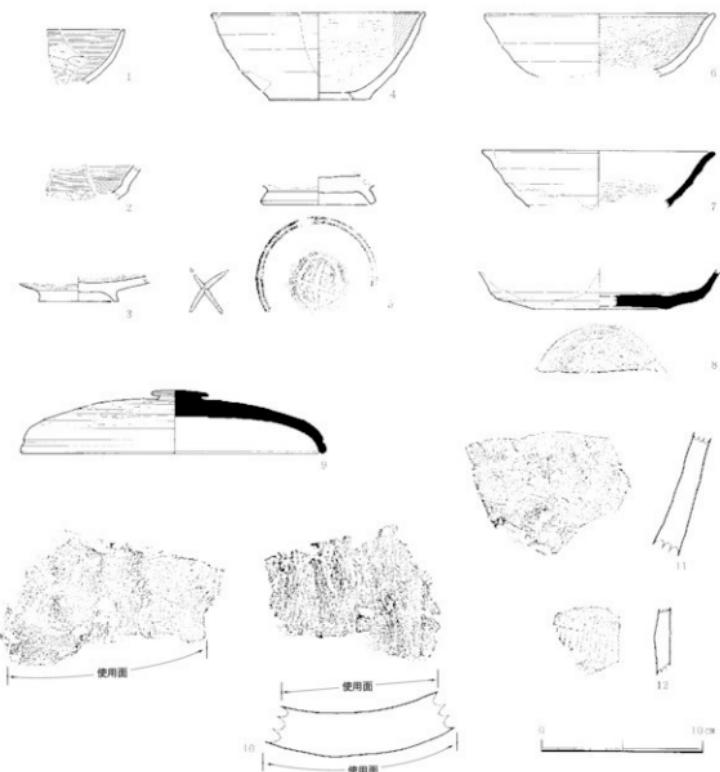
遺構名	位 深	範 囲	範 囲	断面形	上幅	下幅	深さ	方 向	堆 積 層	備 考
78溝	17・20・28	26.5	1.94	1.15	0.48	逆台形	東西・N54° W	黒褐色シルト(自然)	基本層から組りこみ、近代罐器、古代以降	
94溝	17・28	20.4	0.7	0.32	0.15	U形	東西・N49° W	黒褐色シルト質粘土(自然)	遺物の出土はない。96土より新	

満 跡

第21表 検出構造属性表

V. 下富前遺跡出土遺物について（補遺）

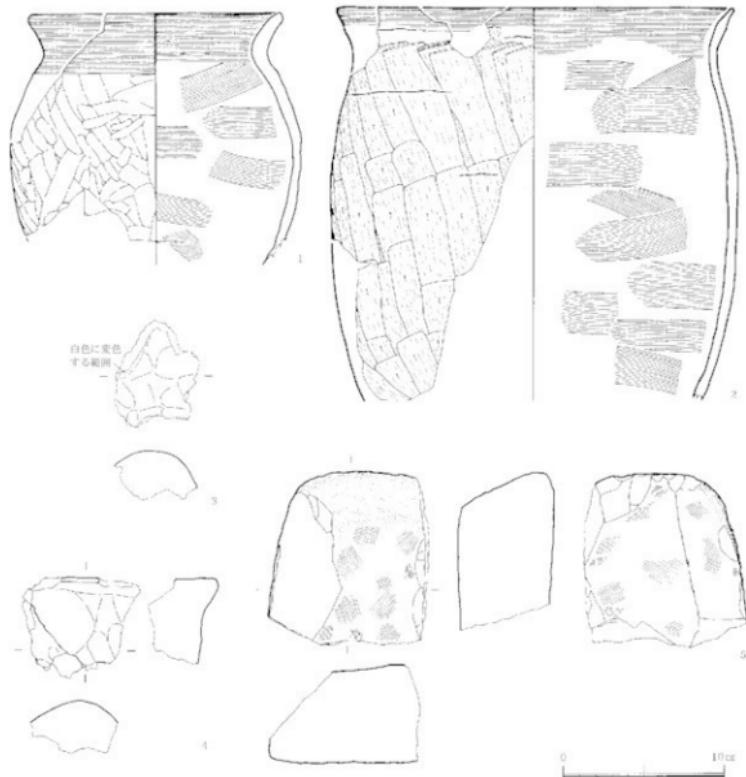
下富前遺跡の発掘調査は平成8年度から実施し、2冊の報告書（瀬峰町教育委員会2000、2002）を刊行している。しかし、紙幅の関係上掲載できなかった出土遺物や第2次調査整理時に認識できなかった関東系土師器がある。ここでは、遺跡の性格を検討する上で重要な遺物について報告を行う。



No.	地区・部位	遺物名	器種	残存	鉢身	口径	底径	特　徴	登録	回数
1	表　探	土　縫　器	环	口～体部	—	—	—	外：横ナギ、ケズリ、に長い赤帯(2.3TR5/2)内：横ナギ、に長い赤帯(2.3TR5/4)、関東土器類	R241	8-12
2	9月川邊縫削	土　縫　器	环	—	—	—	—	外：横ナギ、ケズリ、(R241)10YR8/2L、内：ナギ、輪(R10YR8/2L)、関東土縫削	R242	—
3	1次・26T土質	土　縫　器	高台所	底部	—	—	48	外：ロクロナガの幾何模様にヘラミガギ、黒色地原、ナギ、輪(N3/L)、底部：不明の後ナギ、内：既製模様のヘラミガギの黒色地原、輪(N3/L)	R215	—
4	表　探	土　縫　器	环	1/4	5.4	13.0	6.0	外：ロクロナガ、(R10YR7/2L)、内：ロクロナガ～ヘラミガギ黑色地原、黒(2.3TR2/1)	R251	—
5	表　探	土　縫　器	高台所	底部	—	—	7.0	外：ロクロナガ、(R10YR7/2L)、底：(輪)系切妻リニアギ、ヘラ記号('X')、内：ヘラミガギ(既製模、輪)、黒色地原、黒(N3/L)	R249	8-5
6	表　探	土　縫　器	环	口～体部	14.4	—	—	外：ロクロナガ、(R10YR7/2L)、内：エラギ・黒色地原、黒(2.3TR2/1)	R239	—
7	表　探	田　地　器	环	口～体部	—	14.1	—	外：ロクロナガ、(R10YR7/2L)～(輪)G5TR6/6L、内：ロクロナガの後下半をヘラミガギ、(輪)G5TR7/6L～(輪)G5TR6/6L	R252	—
8	表　探	田　地　器	环	底部	—	—	8.2	外：ロクロナガ、(輪)ヘラケズリ、灰白(10YR8/1L)、底：不明～輪(10YR8/1)、内：ロクロナギ、灰白(10YR8/1)	R253	—
9	表　探	田　地　器	环盖	2/5	3.9	18.6	—	外：ロクロナガ～(輪)ヘラケズリ、灰(10YR8/1)、内：ロクロナガ、灰(ON3/L～N4/L)	R248	8-13
10	17区材近表面	土　質　品	灰石	碎片	残さ：2.4	周長：18.6	—	外：ロクロナガ～(輪)ヘラケズリ、灰(10YR8/1)、内：ロクロナガ、灰(ON3/L～N4/L)、(輪)G5TR6/6L～(輪)G5TR6/6L	R250	—
11	表　探	中世陶器	甕	体部	—	—	—	外：ヘラナギ、(R10YR6/1)～(輪)G5TR6/6L、内：ヘラナギ、灰(10YR6/1)	R249	—
12	北側水路表面	中世陶器	甕	体部	—	—	—	外：格子状の網目、灰(10YR6/13)、内：ナギ、灰(7.5YR6/2)	R254	—

第36図 下富前遺跡採集遺物（1）

V. 下富前遺跡出土遺物について（補遺）



No.	地区・附位	遺物名	器種	保存	測定	口径	底径	特　　徴	登録	回数
1	30T2号通路	土師器	甕	山-堆器	9.2	15.6	—	外縁ナギ、ナギ、明治陶 (GYSR5-80), 内：織ナギ、ヘラナギ、明治 (GYSR5-80)	R016	—
2	真　　原	土師器	甕	1/3	—	25.2	—	内：織ナギ、ヘラナギ、直毛飾+斜上付帯、にじい縞 (GYSR5-4) ~黒 (GYSR1.7/3), 内：織ナギ、ヘラナギ、にじい縞 (GYSR5-4) ~黒 (GYSR1.7/1)	R246	—
3	27T2ピット	土師器	羽口?	一塊	—	—	—	外曲にナギ, にじい縞 (GYSR5-3), 一部白色に変色している	R244	—
4	27T2ピット	土師器	羽口?	一塊	—	—	—	外曲にナギ, にじい縞 (GYSR5-2)	R245	—
5	真　　原	石器類	砾石	下半を欠損か、既2:10.8, 緩1:10.1, 厚2:4.6, 重量:303.7, 現存:—, 石材:砂岩系, 2面を削いており、細かい擦痕が観察される					R247	—

第37図 下富前遺跡出土遺物（2）

VI. 考 察

1. 25~27区について

(1) 出土遺物について

各遺構から出土した遺物は少數で完形のものは少ない。そこでまとめて遺物が出土した遺構の年代を個別に、特徴的な遺物はそれぞれ検討する。

①古代の遺物について

【104号住居跡】

壁を抑えるための板材抜き取り痕より土師器壺、甕が出土した。住居廃絶時に廃棄された一括性の高い出土状況を示すと考えている。壺には製作にロクロを用いない低平で有段丸底のもの、甕には製作にロクロを用いないで頸部に段を持ち平底のものと製作にロクロを用いたものがある。特徴から東北地方南部の土器様式に含まれるもので、製作にロクロを用いたものとロクロを用いないものがあることから国分寺下層式から表杉ノ入式（氏家和典1957、1967）へ変遷する過程での過渡的な状況を示すと考えることができる（註1）。県内で類似する土器群は瀬峰町大境山遺跡23号住居跡（瀬峰町教育委員会1983）や築館町伊治城跡SI04堅穴住居跡出土遺物（宮城県多賀城跡調査研究所1978）、SI12堅穴住居跡（宮城県多賀城跡調査研究所1979）などをあげることができる。これらの類例では床面などから製作にロクロを用いない土師器壺、高台壺、壺蓋、甕、瓶、鉢、製作にロクロを用いた土師器壺、甕、赤焼き土器壺、須恵器壺が出土している。104号住居跡と類例では製作にロクロを用いない土師器甕を含むことでは類似するが、伊治城跡SI04堅穴住居跡で鉢とされている有段で丸底の土師器以外は床面から出土した例を確認できていない。しかし、これらの類例では製作にロクロを用いない平底風の土師器壺とロクロを用いた土師器壺が共伴していることから同時期のものと考えることができ、伊治城跡SI04・SI12堅穴住居跡は8世紀末葉と考えられていることから、104号住居跡も同様の年代を考えている。

【19号建物跡】

柱穴掘り方埋土、柱痕跡、柱抜き取り痕から土師器壺、甕、須恵器が出土した。土師器には製作にロクロを用いたものが含まれ、表杉ノ入式のものと考えができる。このことから、遺構の年代は平安時代のものである。さらにP15柱抜き取り痕から出土した全体の器形がわかる土師器壺は、底面から外傾しながらほぼ直線的にたちあがり、底部全面に手持ちヘラケズリ再調整され丸底風になるものと考えている。1点のみのため比較は難しいが、迫町対馬遺跡第4号住居跡（小井川・高橋1977）で出土したロクロを用いないで製作された壺に類似し、ロクロを用いて製作されたものでは古川市名生館官衙遺跡SI2124（古川市教育委員会1991）、色麻町上新田遺跡8号住居跡出土遺物（宮城県教育委員会1981b）などに器形や調整が類似するものがある。上記の類例はいずれも8世紀末葉から9世紀初頭と考えられているが、城柵官衙遺跡ではロクロを用いて製作された土師器は一般の集落よりも早く導入された可能性が高いことから9世紀初頭頃の年代と考えている。

【103号土坑】

人為堆積層より土師器坏、鉢か甕、須恵器坏が出土した。土師器はいずれも製作にロクロを用いている。坏は底部から直線的に外傾しながら立ち上がり、いずれも口縁部は外反する。底部は回転糸切りの後回転ヘラケズリ再調整のものと手持ちヘラケズリ再調整のものがある。内面底部付近は放射状にミガカれるものがある。口径15.4~17.4cm、底径6.2cm、器高6.1cmである。鉢か甕は内面ヘラミガキされる。黒色は脱色したものと考えている。須恵器坏は底部切り離しが回転糸切りのもので、器高の高いものと低いものが各1点ある。器高が高いものは底部からゆるやかに外傾して立ち上がり、口縁部付近で外反する。口径12.6cm、底径5.1cm、器高4.9cmと底径が小さい。器高の低いものは底部から直線的に外傾して立ち上がり、口縁部付近で大きく外反する。口径14.0cm、底径6.8cm、器高4.1cmである。

このような製作にロクロを用いた土師器坏で再調整を持つ土器群は多賀城市多賀城跡SK2167土壤(宮城県多賀城跡調査研究所1993)、高清水町西手取遺跡第4号住居跡(宮城県教育委員会1980a)、築館町佐内遺跡第28号住居跡(宮城県教育委員会1983)などがある。土師器坏について比較すると多賀城跡SK2167土壤出土遺物では土師器坏は再調整されるものがほとんどであり、須恵器坏の底部切り離しはヘラ切り、回転糸切り、回転糸切りの後手持ちヘラケズリがある。西手取遺跡第4号住居跡では床面の施設などから多数の土器が出土し、土師器坏では再調整されるものとされないものの割合は半々である。手持ちヘラケズリ2点、回転ヘラケズリ2点、再調整をしないものが3点である。須恵器坏の底部切り離しはいずれも回転糸切りによるものである。佐内遺跡第28号住居跡では床面などから多数の土器が出土しており、土師器坏では再調整されるものが主体となる。須恵器坏の底部切り離しはいずれも回転糸切りによるものである。103号土坑出土遺物の中には欠落する器種が多いが、土師器坏では再調整されるものが多いこと、大きさが類似すること、器形に類似するものを含むことからほぼ同時期のもので9世紀中葉頃の年代を考えている。

【関東系土師器】

東北地方南部の土器様式とは異なる特徴をもつ土師器が、2号溝跡から1点(第27図1)、2区表土より1点(第36図1)出土している。形態や調整、内面黒色処理されないことから関東系土師器(村田晃一2000)を考えることができる。遺構から一括性の高い状態で出土したものではないので、県内の類例などから年代を考える。

第27図1は脚部が付く高坏と考えることができる。県内では類似したものは管見の範囲では発見できていない。若干器形は異なるが、古川市名生館遺跡SD356出土の高盤と盤(宮城県教育委員会2000)に類似する可能性を考えている。第36図1はゆるやかに内窯しながら口縁部に至るもので、半円形の器形と考えている。器厚は薄く、胎土をみると在地のものとは異なり緻密であるとともに橙色に発色している。類似するものは矢本町赤井遺跡(矢本町教育委員会2001、佐藤敏幸2003a、b)や古川市名生館官衙遺跡(高橋誠明2003)などから出土している。下富前遺跡出土の関東系土師器は類例から7世紀後葉から8世紀初頭の年代を考えている。

【底部にムシロ痕跡がある土師器】

2号溝跡から1点出土した。溝跡出土のため、正確な年代は不明である。ムシロ痕跡がある土師器は東北地方北部で多数出土しており、この遺物について集成し分析を行った稻野彰子氏はムシロの痕跡からタタミに類するA種、アンギンに類するB種、スダレ、タワラに類するC種に分類している（稻野彰子1995）。この分類を参考にすると下富前遺跡出土遺物遺物はA種に該当すると考えることができる。宮城県内では七ヶ宿町小梁川遺跡、小梁川東遺跡（宮城県教育委員会1985a）、名取市清水遺跡（宮城県教育委員会1981a）、名取市野田山遺跡（宮城県教育委員会1994）、仙台市中田畠中遺跡（仙台市教育委員会1985）、松島町館山館跡（宮城県教育委員会1982）、大和町中峯A遺跡（宮城県教育委員会1985b）、高清水町東館遺跡（宮城県教育委員会1980b）、築館町佐内屋敷遺跡（宮城県教育委員会1983）などから出土しており、稻野氏の分類によるA種が多く、各報告書では平安時代のものと考えられている。下富前遺跡出土例も年代を把握できる特徴はないが、同様の年代を考えている。

【土 壁】

109号土坑より土師器甕、須恵器とともに出土している。109号土坑は重複関係から19号建物跡より新しいものである。遺物は造構上層の自然堆積層から出土したもので、周辺から流れ込んだものである。この土壁は19号建物跡の壁材と考えることができる。土壁で最も状況の良いものは壁面を残すもので、長さ5.0cm、幅3.5cm、厚さ3.2cmで残存する（図版8-14）。胎土には多量のスサが入るもので径0.3~0.6cmのスサ痕跡が直交しているが、縦方向や横方向の木舞、間渡と考えられる痕跡を観察できない。のことから壁の芯となる部分より離れた部位の破片と考えている。

②中世の遺物について

【中世陶器】

95号溝跡、7号溝跡、3号溝跡、表土などから無釉陶器が12点出土した。甕、鉢の破片であり、特徴的な部位は残存しない。甕には胎土や焼成、押印の形態が同じものがあることから同一個体のものもあると考えている。これまで出土している押印は格子のもので、格子の間隔から2種類ある。いずれも特徴から東海地方の製品と考えることができる。陶器の中での施文部位が不明であり、押印の残存状況も悪いため詳細を明らかにできないが、押印は重複しないことと押印の形態から中野晴久氏の論考（中野晴久1992）を参考にすると14世紀前半頃までのものに該当すると考えている。このほか、在地製品と考えることが出来る破片もあるが、特徴のある部位が残存しないことから生産地を特定することはできない。

【土師質土器】

2C号溝跡から1点出土した。底部破片のため全体の器形は不明であるが、小型の皿で底部から外傾しながら直線的に立ち上がる逆台形の器形と考えている。ロクロを用いて製作され、底部切り離しは回転糸切りによる。

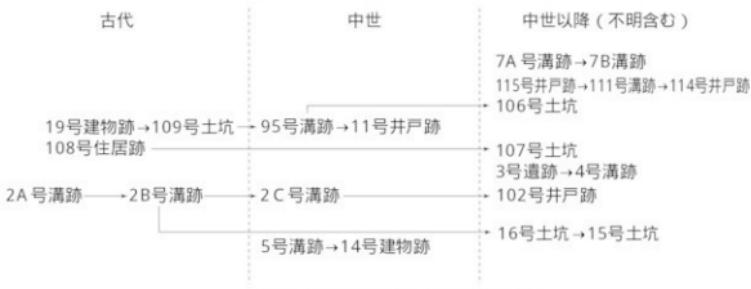
【板碑の可能性がある石片】

7号溝跡から出土した石は、石英脈がみられる質の悪い粘板岩である。これまで町内などで観察してきた近世の石碑類には用いられないものと考えている（註2）。石は横割り技法で採取されており、縁辺を叩いて整形している。また、正面には先盤で突いたくぼみが確認できる。表面に種子や文字の痕

跡を確認できないが、形態や調整技法から板碑の可能性を考えている。

(2) 遺構について

25～27区で確認した遺構の重複関係は第22表のとおりである。



①古代の遺構について

【堅穴住居跡】

堅穴住居跡を2棟確認した。いずれも、調査区の関係や削平により全体を確認できない。このことからカマドなどの施設は不明なものがある。

104号住居跡は北西隅付近を確認した。壁の崩落を防ぐため板材で抑えており、住居解体時に抜き取られている。この抜き取り痕より土器がまとまって出土した。自然堆積ではあるが住居廃絶時の状況を示す一括性の高い出土状況と考えており、8世紀末葉頃の年代を考えている。104号住居跡と類似する方向をもつものとして43号住居跡（瀬峰町教育委員会2002）をあげることができる。43号住居跡は遺物が出土しておらず詳細な時期は不明ではあるが、方向が類似することから同時期の可能性もある。

108号住居跡は壁際に周溝、主柱穴を確認したが、削平や調査区の関係から詳細は不明である。断面で観察すると東西で約4.8mと考えることができ、下富前遺跡で検出している住居跡の中では中規模のものである。特徴のわかる遺物が出土していないことや灰白色火山灰層も確認できていないこと、同一方向を示す住居跡も確認できることから詳細な時期は不明である。

【建物跡】

古代のものと考えている建物跡は19号建物跡と91号建物跡がある。

19号建物跡は桁行5間、梁行2間で東側に1間分の扉をもち、身舎内部には間仕切りの柱穴をもつことが判明した。出土遺物は少数であるが出土した製作にロクロを用いた土師器の特徴から、9世紀初頭頃のものと考えている。

91号建物跡は北側柱列3間分を確認したのみである。北側に該当する柱穴がないことから南側に展開するもので、27区では柱穴を確認できることは梁行きが2間以内の可能性があると考えており

東西棟と推定している。柱穴から遺物が出土せず、詳細な時期は不明であるが、19号建物跡南側柱列と91号建物跡北側柱列は同一方向であることから、同時期か近接した時期のものと考えている。

【溝跡】

古代の溝跡は2号溝跡のみである。完堀は行っていないが、灰白色火山灰（註3）が2次堆積することを再確認した。2次調査の成果では古代ではA号溝跡→B号溝跡（火山灰を含む）に変遷することを確認している（瀬峰町教育委員会2000）。B号溝跡からは7世紀末から8世紀初頭頃の須恵器杯蓋、土師器高坏、関東系土師器、東北地方北部の土師器と類似する特徴をもつ土師器甕が出土しており、A号溝跡に含まれていたこれらの遺物がB号溝跡の掘り直しとその後B号溝跡の堆積が進み、掘り直しの際の廃土とともに流れ込んだと解釈できるならば、これらの遺物の年代がA号溝跡掘削の年代を考える上で参考になるものである。

【土坑】

古代と考えている土坑は13号土坑、103号土坑、109号土坑である。

13号土坑は底面や壁面が斑状に焼けており、火を用いた作業を行っている。遺物には製作にロクロを用いない土師器の甕がある。103号土坑は壁面や底面は焼けていないが焼土、炭化物、土器を多く含む。遺物には製作にロクロを用いた土師器坏、鉢か甕、須恵器坏（墨痕の付着するものある）があり、人為的に埋め戻される。出土遺物から9世紀中葉頃のものである。13号土坑と103号土坑は近接し、13号土坑が焼け面を持ち、103号土坑が堆積層に焼土、炭化物を含むため、両遺構間の遺物が接合するかを試みたが接合しない。堆積層の状況も異なることから、両遺構が直接関連しない可能性を考えている。

109号土坑は19号建物跡より新しいもので、上層に土師器や須恵器、19号建物跡の土壁が含まれる。ところで、19号建物跡と重複する中世の時期である95号溝跡では土壁は出土していない。このことは109号土坑の構築時期を考える上で参考となる。すなわち、19号建物跡の解体後に109号土坑が構築される時点での場所には壁の破片が落ちており、109号土坑が自然埋没していく過程で土壁が流れ込んだものであり、一方95号溝跡構築時には既に自然作用により土壁を含む表土層は流失したと考えができる。このことから109号土坑は19号建物跡が廃絶した後のごく近い時期に構築された古代のものと考えることができるが、詳細な年代や性格は不明である。

【遺構の変遷について】

前報告書（瀬峰町教育委員会2000）で遺構の重複関係や出土遺物から3期の変遷を考えた。本来ならば時間軸として遺跡内の土器編年を設定しなければならないが、遺構の残存状況が悪いため、個別に遺構毎の年代を考え、時期区分を行っている。基本的には前報告書とほぼ変わらないが、改めて遺構の変遷を考える。

I期は須恵器杯蓋、土師器高坏、関東系土師器、東北地方北部の土師器と類似する特徴をもつ土師器甕が出土がする、およそ7世紀後葉頃から8世紀前葉までである。この時期の遺構は確認できないが、2A号溝跡の掘削はこの段階である可能性が高く、2号溝跡は集落の存続した時期に継続して機能したもので、集落内で重要な役割を果たしたものと考えている。

II期は竪穴住居で構成される時期で、遺物はロクロを用いないで製作された土師器が用いられている8世紀中葉頃から9世紀初頭頃のものである。1号住居跡、55号住居跡、104号住居跡などが該当し、これらのなかでも変遷があると考えている。この時期に明確に伴う井戸や土坑は確認できず、住居は重複がなく適度に散在する。

III期は竪穴住居、掘立柱建物、井戸で構成される時期で、遺物はロクロを用いて製作された土師器が出土する9世紀初頭頃から10世紀前葉頃である。19号建物跡、91号建物跡、17号土坑、103号土坑などが該当する。今回の調査区では竪穴住居跡は確認できないが、13区の58号住居跡、14区の63号住居跡、23区の83号住居跡などが重複せず、適度に散在する。また、集落の構成に竪穴住居跡や建物跡から離れた位置ではあるが井戸跡が加わる。建物の方向には北で東に12°ふれるものと北で東に19°ふれるものの大きく2方向があることから、さらに細分できるものと考えている。また、灰白色火山灰層が降下する時期には2号溝跡は土砂の堆積が進んでおり、火山灰層降下以降の住居跡もこれまでの調査では確認できていないことから、火山灰降下前後には集落は廃絶していると考えている。

②中世の遺構について

【建物跡】

中世の建物跡と考えているものは、14号建物跡、20号建物跡、21号建物跡、90号建物跡、116号建物跡、117号建物跡である。いずれも柱穴が30cm程の小型のもので古代のものと比べ小さい。柱間は1.5~2.0mであり一定していない。建物の方向は14号建物跡、21号建物跡、117号建物跡で北で東に17°傾き、20号建物跡と116号建物跡で北で西にわずかに傾くものである。それぞれ同時期の可能性がある。また、異なる方向をもつものは90号建物跡である。建物の方向を基準にして考えると前後関係は明らかにできないが2~3時期の変遷を考えることができる。

【井戸跡】

中世のものと考えている井戸跡は重複関係や出土遺物から9号井戸跡、10号井戸跡、11号井戸跡、12号井戸跡がある。いずれも素掘りで、断面は円筒形のものである。113号井戸跡、114号井戸跡、115号井戸跡は遺物が出土せず時期は不明である。

【溝跡】

中世のものと考えている溝跡は95号溝跡である。上幅0.5~0.8mで断面台形のものである。南側で東西に7m延び、東側で北にほぼ直角に曲がり41m以上延びる。遺構からは中世の遺物が出土しており、近世の遺物を含まないことから中世の時期と考えることができる。95号溝跡は14号建物跡と方向が一致することから、屋敷を区画する目的を持つと考えている。このような視点で遺構配置をみると、南辺では2区で約2.5m一端途切れ、西側に続く溝がある。この溝は2次調査の際には搅乱と認識したものである。今後、この溝跡の続きを確認し精査する必要があるが、この部分で溝が2.2mほど途切れるので、出入り口になる可能性もある。西側では54号溝跡が規模や方向が類似し、この溝から東側でピットが集中することから、西辺を区画した溝の可能性がある。北辺は削平のため検出できていない。このことから東西35m、南北41m以上を溝により方形に区画する屋敷を想定している。

【遺構の変遷について】

各遺構の検討では2~3時期の変遷をもつと考えた。特に95号溝跡は屋敷を方形に開むと想定でき、95号溝跡が機能した時期と機能が停止した時期がある。出土遺物から13世紀から14世紀代と考えており、2C号溝跡は両期に渡り機能したものと考えている。なお、面的な調査ができておらず、どの時期に属するか不明なものもあり、屋敷成立以前の遺構も抽出できていないことから、周辺での面的な調査を行うことが今後の課題である。

I期は溝で開まれた屋敷が機能した時期である。95号溝跡、14号建物跡、21号建物跡、12号井戸跡で屋敷を構成している。このうち、14号建物跡、21号建物跡は直接の重複関係はないが同時に存在できないことから、数時期に細分できる。これらの建物は規模から主屋とはできないが、12区で確認している礎板石をもつピットは屋敷の中心的な建物を構成する柱穴の一つの可能性もあると考えている。また、117号建物跡は屋敷の外に位置しており、3区と27区にも9号井戸跡などがあることから、遺構は屋敷の外にも広がると想定している。

II期は屋敷を開む95号溝跡が機能を停止した段階のものである。11号井戸跡は95号溝跡より新しいものである。位置関係から見て116号建物跡は11号井戸跡の覆い屋の可能性もあり、116号建物跡と同一方向である20号建物跡も同時期の可能性を考えている。95号溝跡廃絶後では建物は小規模で、南側に分布が偏るとすることができる。

2. 28区について

(1) 出土遺物について

96号堀跡、97号建物跡、99号土坑では製作にロクロを使用しない土師器が出土している。古代のものであるが、少数で細片のため詳細な時期は不明である。

(2) 遺構について

①重複関係と遺構の年代

重複関係は下のとおりである。



このうち、96号堀跡、97号建物跡は同一方向を示し、堆積層も類似することから同時期と考えられる。出土遺物が少量しかないので詳細な年代は不明であるが、重複関係や出土遺物より古代のものと考えている。99号土坑は重複関係から古代以降のものである。100・98号土坑は出土遺物がないので不明である。78号溝跡は平成13年度の事前調査で基本層から掘り込まれ、近代以降と考えられる磁器が出土している事から、近代以降のものである。94号溝跡も同一方向を示すことから近接した時期が考えられる。

②「屋敷1」について

96号堀跡は南北32.5m以上、北側で90° 東へ折れ曲がり0.5m以上延びる。このことから、周囲を材木塀で囲む屋敷の存在を想定できるので、屋敷1と呼称する。屋敷1の内部や範囲は調査が及んでいないことから不明である。屋敷1の堀跡外側には同一方向をもつ97号建物跡があり、同時期に機能していたと考えている。詳細な年代は不明ながら古代のものである。屋敷1より約50m西に位置する桁行5間、梁行不明の東西棟である67号建物跡は方向が一致している。67号建物跡は10世紀前葉頃の土器が廃棄される68号土坑より古い。屋敷1と67号建物跡が同時期とすれば10世紀前葉以前とすることができ、前で検討した遺構変遷のⅢ期に属するものである。

3. 平安時代における遺跡の性格について

これまでの検討により平安時代になると大型建物、住居、井戸で構成される集落が成立することが判明した。特に、面的な調査がほとんどできていない状況で桁行5間の大型建物跡を2棟確認できたことは特筆できる。19号建物跡は桁行5間、梁行2間、東側に1間分の廊を持ち、身舎には間仕切りの柱穴をもつ。このような建物は宮城県内では城柵官衙遺跡か関連する類似遺跡で確認されている。このことは下富前遺跡の建物が公的な機能を有した可能性があることを示唆するものである。さらに桁行5間、梁行不明の68号建物跡、縁軸陶器の出土、堀跡で囲まれた屋敷1の存在にも注目して下富前遺跡の性格を考えると、有力者の居宅か小山田川沿岸沿いに立地する河川交通に関わる何らかの公的な施設の可能性がある。しかし、これまでの調査では規則的な建物配置や官衙特有の出土遺物を確認できておらず、また、遺構変遷や遺物から遺跡の全容を解明できていないので、面的な調査を行うとともに周辺の諸遺跡との比較検討を進め歴史的な背景を検討する必要がある。

註

註1 このような土器群は「伊治城型土器組成」(白鳥良一1980)と呼称されているが反論もある(瀬峰町教育委員会1983ほか)。

註2 佐藤信行氏からも同様の意見をいただいた。

註3 灰白色火山灰の降下年代は秋田県払田柵外郭材木列の年輪年代測定法や仙台市陸奥国分寺跡の調査成果から考古学的には西暦907~934年の間と考えられている(宮城県多賀城跡調査研究会1998、76頁)。また、「扶桑略記」の記述から西暦915年をあてる見解もあるが、ここでは考古学的な事実関係から西暦9907~934年と考える。

VII. まとめ

1. 下富前遺跡は標高約7m、小山田川左岸の微高地上に立地している。前回までの調査によって、繩文土器、奈良・平安時代の土師器(在地、東北地方北部系土師器、関東系土師器)、赤焼き土器、須恵器、縁軸陶器、中世陶器、土師質土器、鉄製品、石製品などが出土している。
2. 表土や溝堆積層からの出土ではあるが7世紀後半から8世紀初頭頃の関東系土師器、涌谷町長根窯跡産に類似した須恵器壺蓋、土師器高杯などが出土している。これらは遺構に伴わず、また、概期の遺構を検出できていないため不明な点があるが、下富前遺跡には7世紀末葉から8世紀初頭頃の遺構が存在していた可能性が高い。

3. 2・12・25・26区で確認した19号建物跡は桁行5間、梁行2間で東に1間分の廊をもつ建物跡であり、柱穴掘り方や抜き取り痕から出土した遺物より平安時代の建物跡と確定することができた。なお、3次調査で検出した桁行5間、梁行不明の68号建物跡も重複関係から10世紀前葉以前のものと考えられ、詳細な時期は不明ではあるが、下富前遺跡では9世紀初頭頃に掘立柱建物、竪穴住居、井戸で構成される集落になるとを考えている。
4. 28区では平安時代のものと考えている一辺30m以上を堀で囲んだ屋敷1を確認した。調査区の関係上、屋敷1の内部や堀の調査が一部にとどまることから、性格や遺構の配置は、今後面的な調査を行い検討する必要がある。
5. 下富前遺跡での遺構の変遷は8世紀代には竪穴住居で構成される集落が成立し（古代Ⅱ期）、その後に平安時代には竪穴住居に掘立柱建物、井戸が集落の構成に加わる（古代Ⅲ期）。掘立柱建物跡には大型建物があるとともに堀で囲まれた屋敷や綠釉陶器、墨書き土器が出土することから、これまで調査を行った周辺の集落遺跡の遺構構成とは異なっている。このことから、周辺の一般的な集落とは異なる性格をもつと考えている。灰白色火山灰が降下した後の遺構を確認できないので、集落は廃絶した可能性がある。
- 中世では一辺30~40m前後の溝で囲まれた屋敷が成立し（中世Ⅰ期）、廃絶後も小規模な建物や井戸は継続して營まれる（中世Ⅱ期）。年代は13~14世紀代を考えている。遺物は少数であり、甕や鉢が多い傾向にある。貿易陶磁や施釉陶器がほとんど出土しないことから一般的な屋敷である可能性が高い。

引用参考文献

- 阿部正光 1983「瀬峰町三代遺跡出土の土器」『瀬峰町の文化財』第2集瀬峰町教育委員会
- 阿部正光・赤沢清章 1984「瀬峰町大里字富蒲盛出土の蔵骨器、および骨片」『瀬峰町の文化財』第3集 瀬峰町教育委員会
- 阿部正光・赤沢清章・佐藤敏幸 1987「瀬峰町泉谷館跡・清水山I遺跡発掘調査概報」『瀬峰町の文化財』第6集 瀬峰町教育委員会
- 稲野彰子 1995「いわゆるムシロ底について」『北上市立博物館研究報告』第10号 北上市立博物館
- 氏家和典 1957「東北地方土師器の型式分類とその編年」『歴史』第14輯 東北史学会
- 氏家和典 1967「陸奥国分寺跡出土の丸底杯をめぐって」『柏倉亮吉教授還暦記念論文集』
- 小井川和夫・高橋守克 1977「宮城県対馬遺跡出土の土器」『宮城史学』第5号
- 佐々木尚見・阿部正光 1982「瀬峰町の遺跡…桃生田前遺跡/下富前遺跡/中三代遺跡」『瀬峰町の文化財』第1集 瀬峰町教育委員会
- 佐藤敏幸 2003a「多賀城創建にいたる黒川以北十郡の様相－海道地方－」『第29回古代城柵官街遺跡検討会資料』
- 佐藤敏幸 2003b「律令国家形成期の陸奥国牡鹿地方（1）－古代牡鹿地方の土器様式－」『宮城考古学』第5号 宮城県考古学会
- 白鳥良一 1980「多賀城跡出土土器の変遷」『研究紀要』VII 宮城県多賀城跡調査研究所
- 菅原祥夫 2000「平安時代における蝦夷系土器の南下－蝦夷の移住をめぐって－」『阿部正光追悼論集』阿部正光君追悼集刊行会
- 鈴木玄雄 1922「栗原郡藤里村誌」上巻 栗原郡藤里村誌編纂委員会
- 瀬峰町史編纂委員会 1966『瀬峰町史（全）』瀬峰町
- 瀬峰町教育委員会 1977『がんげつ遺跡－平安時代の竪穴造構－』瀬峰町文化財調査報告書第1集
- 瀬峰町教育委員会 1979『長者原II遺跡』瀬峰町文化財調査報告書第2集

- 瀬峰町教育委員会 1980『がんげつ遺跡第2次発掘調査報告書』瀬峰町文化財調査報告書第3集
- 瀬峰町教育委員会 1983『大境山遺跡』瀬峰町文化財調査報告書第4集
- 瀬峰町教育委員会 1985『がんげつ遺跡第3次発掘調査報告書』瀬峰町文化財調査報告書第5集
- 瀬峰町教育委員会 1988a『下藤沢Ⅱ遺跡』瀬峰町文化財調査報告書第6集
- 瀬峰町教育委員会 1988b『長者原Ⅱ遺跡』昭和63年度宮城県遺跡調査成果発表会資料
- 瀬峰町教育委員会 1989『民生病院裏遺跡』瀬峰町文化財調査報告書第7集
- 瀬峰町教育委員会 2000『桃生田前遺跡・下當前遺跡』瀬峰町文化財調査報告書第19集
- 瀬峰町教育委員会 2002『下當前遺跡』瀬峰町文化財調査報告書第20集
- 瀬峰町教育委員会 2003『長根遺跡』瀬峰町文化財調査報告書第21集
- 瀬峰町教育委員会 2004『清水山1遺跡ほか』瀬峰町文化財調査報告書第22集
- 仙台市教育委員会 1985『中田畠中遺跡－第2次調査報告書－』仙台市文化財調査報告書第78集
- 高橋誠明 2003『多賀城創建にいたる黒川以北十郡の様相－山道地方－』『第29回古代城柵官衙遺跡検討会資料』
- 武田和宏 2003『「ブラシ」を使用しない洗浄方法について～土器に残された情報を失わないために～』『第1回東北文字資料検討会』
- 田尻町教育委員会 1997『新田柵跡推定地』田尻町文化財調査報告書第3集
- 田中広明 2003『地方の豪族と古代の宮人考古学が解く古代社会の權力構造』KASHIWA学術考古学ライブラリー 01柏書房
- 辻秀人 1995『福島県・東北の古代官衙とその周辺』『日本考古学協会1995年度茨城大会シンポジウム3 地方官衙とその周辺』日本考古学協会茨城大会実行委員会
- 中野晴久 1992『中世知多古窯址群の押印文－ミクロ流通史のための予備的研究－』『知多半島の歴史と現在』No.4 日本福祉大学知多半島総合研究所校倉書房
- 古川市教育委員会 1991『名生館官衙遺跡X I－平成2年度発掘調査概報－』古川市文化財調査報告書第10集
- 久本町教育委員会 2001『赤井遺跡I』久本町文化財調査報告書第14集
- 宮城県教育委員会 1980a『西手取遺跡』『東北自動車道遺跡調査報告書II』宮城県文化財調査報告書第63集
- 宮城県教育委員会 1980b『東船遺跡』『東北新幹線関係遺跡III』宮城県文化財調査報告書第65集
- 宮城県教育委員会 1981a『清水遺跡』『東北新幹線関係遺跡V』宮城県文化財調査報告書第77集
- 宮城県教育委員会 1981b『上新田遺跡』『長者原貝塚上新田遺跡』宮城県文化財調査報告書第78集
- 宮城県教育委員会 1982『館山館跡』『松島有料道路開通調査報告書I 館山館跡・山上遺跡』宮城県文化財調査報告書第87集
- 宮城県教育委員会 1983『佐内星敷遺跡』『東北自動車道遺跡調査報告書III』宮城県文化財調査報告書第93集
- 宮城県教育委員会 1985a『小梁川遺跡・小梁川東遺跡』『七ヶ宿ダム開通遺跡発掘調査報告書I』宮城県文化財調査報告書第107集
- 宮城県教育委員会 1985b『中峯遺跡』宮城県文化財調査報告書第108集
- 宮城県教育委員会 2000『名生館遺跡』『名生館遺跡ほか』宮城県文化財調査報告書第183集
- 宮城県多賀城跡調査研究所 1978『伊治城跡I』多賀城跡開通遺跡調査報告書第3冊
- 宮城県多賀城跡調査研究所 1993『多賀城跡』宮城県多賀城跡調査研究所年報1992
- 宮城県多賀城跡調査研究所 2001『桃生城跡X』多賀城跡開通遺跡調査報告書第26冊
- 宮城県多賀城跡調査研究所 1998『多賀城跡』宮城県多賀城跡調査研究所年報1997
- 涌谷町教育委員会 1971『長根窯跡』
- 村田晃一 1994『宮城郡内の10世紀前後の土器様相』『福島考古』第36号 福島県考古学会
- 村田晃一 2000『飛鳥・奈良時代の陸奥北辺－移民の時代－』『宮城考古学』第2号 宮城県考古学会
- 奈良文化財調査研究所 2003『古代の官衙遺跡I 遺構編』

27区全景（北より）



26区全景（北より）



108号住居跡（南より）



104号住居跡
(南より)



19号建物跡南辺
(25区、南より)

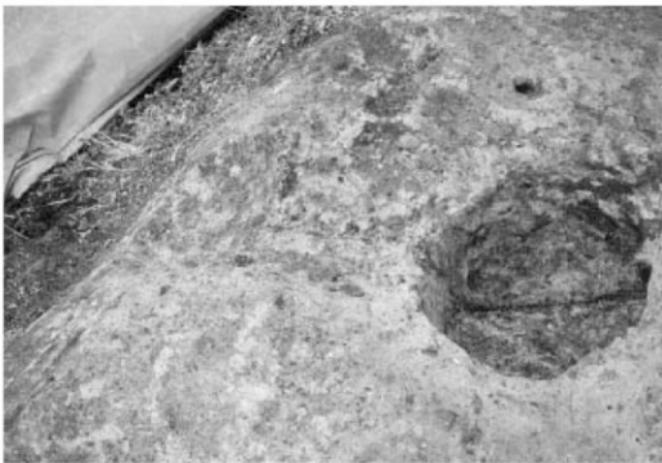


19号建物跡
(26区、南より)

19号建物跡
(2区、南より)
農道が26区



13号土坑、103号土坑
(南より)



103号土坑断面
(南より)





112号井戸跡
(東より)



113号土坑
(北より)



28区全景
(南より)



96号堀跡

(南より)



96号堀跡

(西より)



96号堀跡

(西より)

96号堀跡北西隅
(北より)



96号堀跡断面
(北より)



97号建物跡
(西より)





1 土師器甕 (R 262)



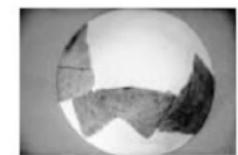
2 土師器坏 (R 260)



3 土師器坏 (R 264)



4 須恵器坏 (R 263)



5 須恵器坏底部の墨書 (R 263)



6 須恵器壺 (R 274)



7 土師器坏 (R 268)



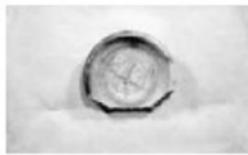
8 土師器坏 (R 261)



9 土師器甕の底部 (R 265)



10 関東系土師器坏 (R 272)



11 土師器高台坏 (R 249)



12 関東系土師器 (R 241)



13 須恵器坏蓋 (R 248)



15 板碑? (R 282)



14 土壁

1～5…103号土坑

6～10…2号溝跡

11～13…採集

14…109号土坑

15…7号溝跡

附章 濑峰町大里地区県営担い手育成は場整備事業に伴う確認調査・工事立会報告

I. 位置と歴史的・地理的環境について

瀬峰町大里地区県営担い手育成は場整備事業で対象となった地区は瀬峰町を東西に横切る穩やかで低平な4つの丘陵中、荒町丘陵と寺沢丘陵に挟まれた小山田川右岸の沖積地に立地する。標高約6mと低く、現在、田地、畑地として利用されている。東方約2kmには、県北湖沼地帯の一つ蕉栗沼がある。戦後の干拓事業により湖水域は減少しているが、干拓の進まない古代、中世頃には周辺まで湖水域が広がっていたものとみられる。この地区的水田開発は泉谷大内家文書(瀬峰町教育委員会1991~2000、2004)などにみえ、江戸期には始まっていると考えている。

周辺の丘陵地には多くの遺跡を確認できるが、沖積地では遺跡を確認することはできていない。しかし、隣接する牛渕地区には瀬峰町内最古の正安4年(1302)銘の板碑(註1)があり、中世から近世頃に周辺の開発が進むことで微高地に屋敷が造られ、生活の場として利用された可能性がある(註2)。

II. 瀬峰町大里字中本寺地区(伝「茂林寺」跡)

1. 調査に至る経緯

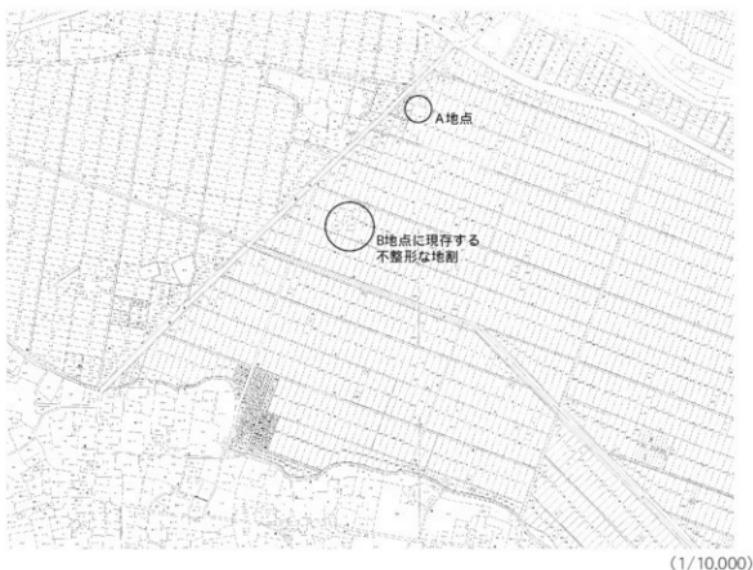
平成6年、宮城県農政部より大里地区は場整備事業の計画について協議があった。対象地では周知の埋蔵文化財が直接かかわるものはなかったが、隣接する丘陵縁辺部に所在する旗塚遺跡の一部でかかわりがあると判断された。また、遺跡登録されていないが、瀬峰町大里字中本寺地区内に所在する江戸時代初期頃とされる伝「茂林寺」跡がかかり合いをもつことが判明した。瀬峰町教育委員会では、伝「茂林寺」跡と考えていた畑地(A地点)については周知の埋蔵文化財に準ずる扱いとし、地区除外するよう要望した。なお、A地点は近年まで墓地であり、昭和50年県道改良工事の際、近世墓の改葬



第38図 調査区の位置と周辺の遺跡



第39図 本寺地区周辺の航空写真（米軍撮影、昭和22年）



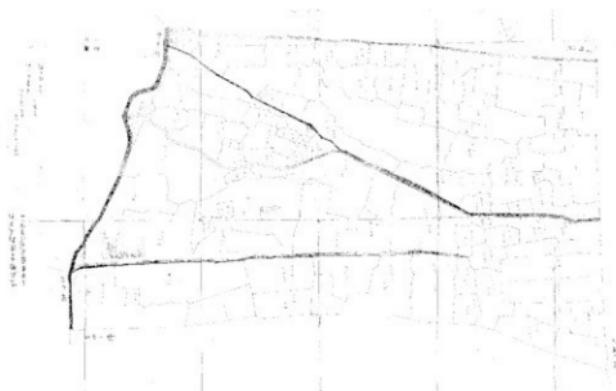
第40図 濑峰町作成の地籍図

も行われたという。現地には現在貞享2年(1685)の近世墓標1基がある。

一方、地元の方々に再度聞き取りを行い、「茂林寺」跡がA地点ではなく、『奉誦誦大乘妙典千部供養塔』碑があり、かつて銀杏の大木があったというB地点(註3)である可能性が高いことが判明した。B地点は昭和30~40年代まではA地点と同様微高地で墓地であったが、現在は開田に伴う削平を受けている。瀬峰町税務課蔵の『明治19年作成 大里村字中本寺地籍図、字中中ノ辻地籍図、字堀籠地籍図』、瀬峰町作成の現況地籍図及び昭和22年米軍撮影空中写真で検討を行い、B地点には現況地籍図でも不整形な地割りを読みとることができた(註4)。平成13年2月にあらためて宮城県教育文化財保護課、宮城県築館産業振興事務所、瀬峰町産業課、瀬峰町教育委員会で対象地の取り扱いについて協議を行い、A地点については不



1. 字堀籠地籍図



2. 字中本寺地籍図

(1約1/8,000)

第41図 明治19年大里村作製の地籍図 (瀬峰町税務課蔵)

明瞭な点が多いので工事立会を行うこととした。

平成14年9月6日にA地点の石碑移転とともに10m²について確認調査を行ったところ、石碑は原位置を動いたもので、下層では改葬された近世墓の落ち込みを3ヶ所で発見したため、宮城県教育庁文化財保護課に連絡し協議を行った。その結果、近世墓の構造を把握することと神積地の堆積状況を確認するため、残存状況が良好であるとみられる1基について、埋土の半分を掘り下げ、掘り方壁面で基本層を観察した。壁面では灰白色火山灰層を確認し、上層は水田耕作土の可能性があると考えた。

また、10月17日から22日まで水路部分及び切土工に伴う工事立ち会いを実施した。改葬された近世墓と思われる15基前後の落ち込みを確認し、位置のみを記入した。11月5、6日に水路部分の6地点で堆積状況の把握のため柱状図を作成し、灰白色火山灰層より新しい落ち込みを工事用の地図に記入し、記録を作成した。B地点では各田面レベルの平均による面工事であり、面工事後踏査を行ったが遺構や遺物は発見できなかった。記録は確認調査では1/50の平面図、遺構は1/20で作成し、立会の際に工事用図面に略位置を記入した。写真記録は35mm カメラ(カラー)を用いた。

2. 虎渓寺と伝「茂林寺」について

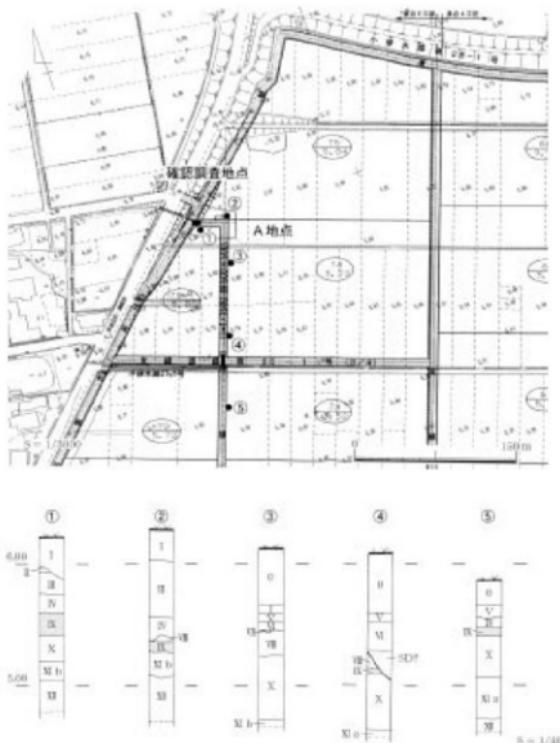
瀬峰町大里字中荒町61に所在する水色山虎渓寺は曹洞宗通玄派に属する。登米郡東和町米谷冷松寺の末寺で、天正8年(1580)冷松寺七世来庵長徳和尚の開山、高橋和泉を開基とする。享保11年(1726)中興の六世家山禅梁和尚の際、本堂を新築したことが棟札から判明する。また、家山和尚や弟子の千英(七世)、萬英により元文5年(1740)に「一字一石書写之塔」(佐々木・阿部・赤沢・佐藤1987)、延享4年(1749)に「奉誦説大乘妙典千部供養塔」(石碑No.2)が建立され、積極的な活動を行った。なお、境内には周辺から納められたものを含む5基の板碑と近世墓標(鷲碑ほか)などがある。嘉永7年(1854)の奥付けをもつ『虎渓寺過去帳』(註5)には、古の話として虎渓寺は本来字「本寺」内にあり現在地に移転したという記録がある。移転以前の寺名は「茂林寺」であるとされている(鈴木玄雄1922、瀬峰町1966)。

3. 基本層序

基本層は沖積地で小山田川の旧河川による影響を受けるため、各地点で複雑で一定しない。灰白色火山灰層の標高も上下が見られ、また、前後の堆積層も一致しないものがみられる。

%	土 色	土 性	しまり	粒性	古物等	厚さ
I	黒褐色(0YR3/2)	砂質 シルト	なし	なし	耕作土。水田部分では面工事による削除できないが地盤が残存する地点も見られた。	30~40
II	黒褐色(10YR3/1)	砂 質 シルト	あり	なし	あまりにのみ見られる。下層に礫化鉄の集結。苔根→埋代鉄鉱鉄土。墓地改修に伴う堆积。	18~32
III	灰褐色(10YR5/3)	砂 質 シルト	あまり	なし	苔根鉄鉱出露。下層に水色粘土を礫状に含む。	30~50
IV	黑色(10YR2/1)	シルト質 砂	ふつう	ふつう	下層に水色砂、耕作土。	17
V	黒褐色(5Y4/1)	シ ル ト	あり	なし	②地点では白色鉄(又稱鉄錆)を若干含む。	7~10
VI	オリーブ黒色(7.5Y3/1)	シ ル ト	あり	なし	②地点では白色鉄(又稱鉄錆)、鐵化物をまばらに含む。	8~22
VII	灰褐色(10YR7/1)	シ ル ト	あり	なし	高い火山灰層。又層に巻き上げられたもののか。	2
VIII	灰褐色(5Y4/1) ~ 黃褐色(2.5Y4/1)	シ ル ト	あり	なし	②地点では白色鉄(又稱鉄錆)を若干含む。下層に凹凸足跡は見られる。耕作土。	3~20
IX	灰褐色(5Y4/1)				千葉山大山灰層。	10~20
X	黒褐色(10YR3/2) ~ 黑褐色(1N5/1)	粘土質 シルト	ふつう	あり	灰褐色を礫中に、未分解の植物遺体を若干含む。	22~53
XIIa	黒褐色(2.5Y4/1)	粘 土	ふつう	あり	未分解の植物遺体をまばらに含む。	24
XIIb	黒褐色(2.5Y5/1)	砂質 シルト	ふつう	ふつう	灰褐色を礫中に含む。	20
XIII	黒褐色(2.5Y3/1)	シルト質 粘土	なし	あり	未分解の植物遺体をまばらに含む。	38EL1

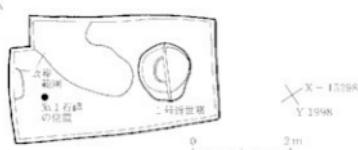
第24表 基本層序



第42図 調査区と基本層序

4. 検出した遺構と遺物

検出した遺構は改葬された近世墓とみられる落ち込み3ヶ所である。そのうち保存状況が良好とみられる1号近世墓について精査を行った。調査は棺堆積層及び墓坑掘り方を半分のみ掘り下げた。堆積層のすべての除去は行わなかった。また、水路掘削部での工事立会の際、数地点（総数約15基前後）で近世墓とみられる落ち込みを確認したが、詳細な記録を作成することはできなかった。形態には円形と長方形があり、いずれも棺をもつ。



第43図 確認調査区

(1) 近世墓と出土遺物

1号近世墓

〔位 置〕 確認調査区東側。

〔確認面〕 基本層序Ⅲ層中。

〔重 複〕 改葬は掘り方内で納まる。

〔平面形〕 円形で南側が張り出す。

〔規 模〕 東西1.0m×南北1.5m

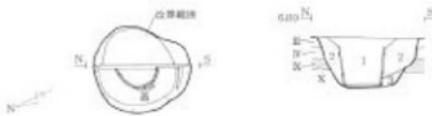
〔層 位〕 大別1層、人為堆積。

〔壁 〕 基本層序Ⅲ～X層。1.20m残存。底面からやや急に立ち上がる。

〔底 面〕 基本層序X層。底面はほぼ平坦である。

〔棺 〕 直径58cmの円形棺である。長軸50cmほど、短軸10～15cmほどの割り材を用い、3カ所を竹材で押さえる。

〔出土遺物〕 改葬のため遺物は出土しなかった。



No	土 色	土 性	含む物等	堆積範囲
1	緑褐色(GG2/D)	砂 質 シルト	V字ブロックを若干含む、人骨	改葬
2	灰褐色(GG5/1)	砂	灰 (GG5/1) 色粘土ブロックを多く含む、人骨	
3	褐色(73YR4/4)	砂		削り方

第44図 1号近世墓

(2) 出土遺物について

確認調査や工事立会い中の基本層や廃土から、赤焼土器、近世～現代の陶磁器、副葬品である古錢、加工痕のみられる石材が出土した。

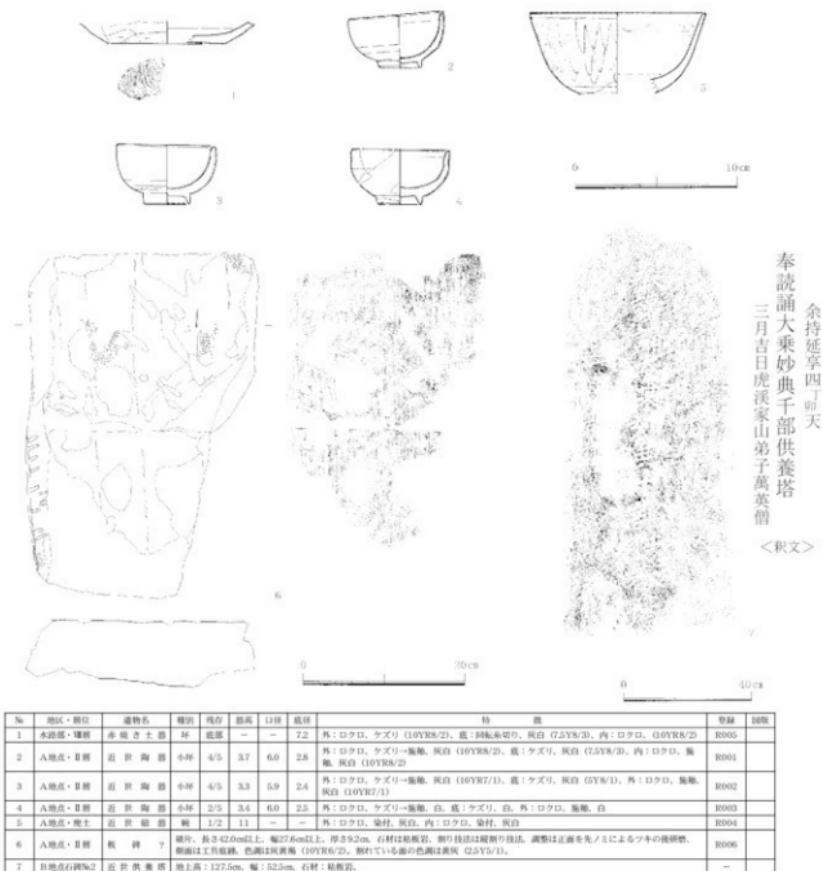
近世陶器小壺(2～4)は釉薬が異なるが、形態や胎土は類似するので同一生産地の製品の可能性が高い。

近世磁器碗(5)は肥前産で外面に網目文がある。

6
は加工痕の残る石材である。表面は先ノミによるツキの後、丁寧に研磨される。側辺には加工痕がみられる。表面には文字をできないが、調整方法から板碑と考えられる(註6)。

層 位	種 别	確認地点 Ⅰ組	本路部 Ⅱ組	八戸点 廃土	合計
土 壤	砂	0	1	0	1
近 世 陶 器	壺	4	0	8	12
近 現 代 陶 器	壺	3	0	0	3
板 磁 7 - 11 石	砂	2	0	0	2
古	砂	0	0	2	2
合 计		9	1	10	20

第25表 本寺地区出土遺物集計表



第46図 遺構出土外遺物

5.まとめ

- (1) 潤峰町大里地区中本寺地区は小山田川右岸標高約6m前後の沖積地に位置する。
- (2) 伝「茂林寺」と考えられる遺構、遺物はA地点及びB地点ともに発見することはできなかったが、聞き取りや石碑の存在からB地点が「茂林寺」の所在地である可能性が高い。しかし、削平のため詳細は不明である。

A地点は明治19年には字「堀籠」であり、江戸時代も同様である可能性が高いと考えている。

調査では近世墓を確認した。精査をできなかつたため墓地の成立や変遷は不明であるが、残存していた墓標から墓地の成立は江戸時代前期頃と考えることができ、出土遺物などから江戸期以降も継続して利用されたとみられる。

(3) 基本層に灰白色火山灰層が部分的に確認できた。面的な調査を実施してないため詳細は不明であるが、灰白色火山灰層上層である基本層Ⅳ・Ⅶ層は凹凸が顕著で攢押されている状況から中世から近世にかけての水田耕作土と考えている。灰白色火山灰層の下層は未分解の植物遺体を多く含む水成堆積層であり、住居等を構築できる場所ではなく、また、水田耕作土とみられる層も認識できなかった。古代の生産領域については今後丘陵部に位置する遺跡の周辺にある沢等を視野に入れ検討する必要がある。また、小山田川沿岸の自然堤防上に遺跡（集落遺跡や生産遺跡）が所在するかどうかも今後確認していく必要がある。

註

註1 用水堰から出土したものである（鈴木玄雄1922、210頁）。

註2 牛渕地区の西側約1.5kmには中世的な地名である「在家前」がある。

註3 濱峰町1966、376~377頁。

註4 整理作業時にA地点が明治19年地籍図作成時には字「堀籠」内であることを確認した。

註5 『栗原郡藤里村誌』上巻、245~246頁に「当水色山之儀村老尋問以前本寺申所有之候、若然是地者仁家離田野代々往僧不自由成付、右寺地所替志願望之時當御領主御國中御巡見御出馬之節、当村御休殿御幸成有、其家代々所持之御高御用捨有而主高橋某号此仁般依有之虎溪山門此地引持高之内相隔場所野沢申所面田代八拾苑寄進之依之右氏當寺開基所仰、然宗室廟居士今村之知所（後略）』とある。

註6 『栗原郡藤里村誌』上巻、210頁には「佐々木捨太郎所有地の古井戸を浚渫した際に底の枠を引き上げたところ古碑の破損したもので、牛渕東の旧墓地に置いた。2基の破片と思われる」という記述がある。出土した破片はこれに該当する可能性がある。

III. 濱峰町大里字中新井堀地区

1. 調査目的と経緯

濱峰町大里字中新井堀153には南北約40m、東西約20m、現水田より約2mの高さをもつ高まりがある。この高まりの性格は不明であり、昭和22年米軍撮影航空写真では周囲を方形に囲まれた区画を読みとることができたため、堀で囲まれた屋敷が存在した可能性を考えた。その後、明治19年作成地籍図で検討を行う予定であったが発見できぬため検討できていない。

平成15年5月に宮城県建築産業振興事務所、濱峰町産業課に対象地の一部を試掘することについて協議を行い、工事前に実施することとした。試掘は10月21日に実施した。初めにトレンチ1本を設定し、遺構や遺物が確認された場合、トレンチを増やす予定とした。重機で掘り下げたところ約1.5mほどは近世以降に形成された可能性が高く約1.8mで灰黄褐色シルトの地山面となること、地山面では柱材の残存する柱穴や黒色土の落ち込みや旧河川堆積層とみられる砂層を確認した。しかし、落ち込みから遺物が出土せず、時期が不明のため遺跡と断定することは出来ず、宮城県教育庁文化財保護課と協議し試掘を終了した。なお、灰黄褐色シルト上面の標高と田面計画高はほぼ同じ標高である。

り、工事により黒色土の落ち込みは削平を受ける。記録は1/50の平面図、1/20の断面図を作成し、写真撮影を行った。試掘面積は15m²である。

2. 試掘の概要

I～IV層までは出土遺物から近代以降に形成されたもので、V層は落ち込みの掘り込み面であると考えた。落ち込みは柱痕跡が確認できない径30cmほどのピット状のものと径1m前後で不整形のものがある。一部については掘り下げを実施しているが、遺物は出土していない。遺物は土師質土器、近世陶器が出土している。陶器は皿か鉢の体部破片である。

青緑釉で内面には白化粧土がハケ塗りされる。唐津系のもので、17世紀末以降の年代が考えられる（大橋康二1991、九州近世陶磁研究会2000）。



第46図 ピット1断面

層位	種別		不明 (壁面消滅時)	合計
	1層	3層		
土師質土器	0	0	1	1
古世陶器	1	0	0	1
近世陶器	0	1	0	1
他	1	0	0	1
合計	2	1	1	4

第26表 新井堀地区出土遺物集計表

3. まとめ

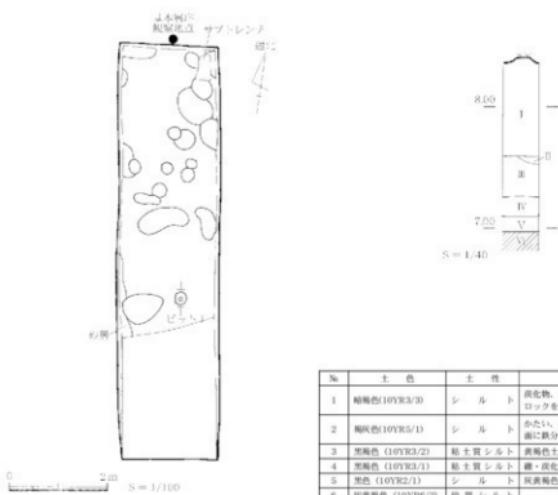
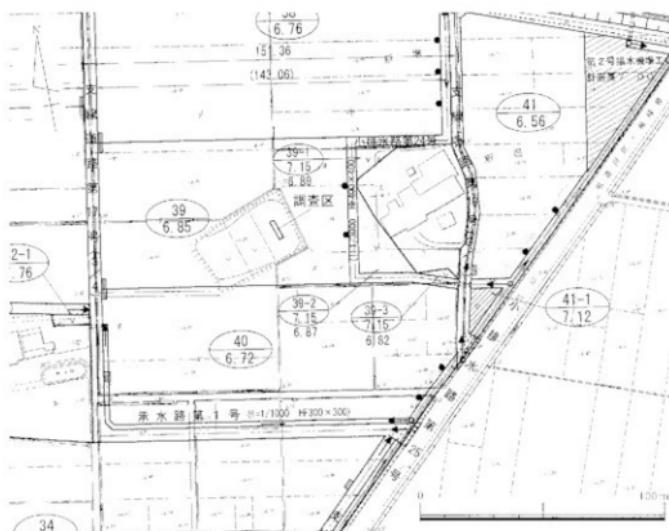
潤峰町大里新井堀地区の高まりは小山田川右岸標高約7m前後の沖積地にあり、約2m程の比高差を持つ。約1.8m下の灰黄褐色シルト層で黒色土の落ち込みを確認したが、遺物が出土せず時期は不明である。古代や中世の遺物は出土せず、廃土から近世頃の遺物が確認できたことから、近世以降に生活の場となつたと考えている（註1）。小山田川沿岸における低地部分の利用状況についてはさらに検討を行っていく必要がある。

註

註1 『栗原郡藤里村誌』上巻によれば、寛永18年（1641）の検地帳に「新井堀屋敷／新百姓／彌四郎」の記載がある（鈴木玄雄1922、138頁）。

引用文献

- 大橋康二 1991 『肥前陶磁』考古学ライブラリー55 ニュー・サイエンス社
- 九州近世陶磁学会 2000 『九州陶磁の編年』
- 佐々木・阿部・赤沢・佐藤 1987 「潤峰町内にある板碑・石碑等調査報告（6）」『潤峰町の文化財』第6集 潤峰町教育委員会24～35頁
- 鈴木玄雄 1922 『栗原郡藤里村誌』上巻 栗原郡藤里村誌編纂委員会
- 潤峰町教育委員会 1991～2000、2004 『泉谷大内家文書（一）～（十一）』潤峰町文化財調査報告書第8、10～18、24集
- 潤峰町史編纂委員会 1966 『潤峰町史（全）』潤峰町



No.	土色	土性	含有物等	堆積範囲
1	褐灰色(10YR3/20)	シルト	炭化物、褐灰色シルト、灰黃褐色シルトブロックをまばらに含む。	表土・耕作土等
2	褐灰色(10YR3/1)	シルト	少ない、灰黃褐色シルト粒を若干含む。上面に鉄分の集積あり。	
3	黒褐色(10YR3/2)	粘土質シルト	炭化物、粘土粒、炭化物粒を若干含む。	
4	黒褐色(10YR3/1)	粘土質シルト	粘土粒、炭化物粒を若干含む。	
5	黒色(10YR2/1)	シルト	灰黃褐色シルト粒を若干含む。	細良土小、地山
6	灰黃褐色(10YR6/20)	砂質シルト		

第47図 調査区平面図



調査前の風景（南から）



調査区全景（南西から）



1号近世墓検出状況（北から）



1号近世墓断面（西から）



1. 近世磁器小壺 (R001)



2. 近世磁器小壺 (R002)



3. 近世磁器小壺 (R003)



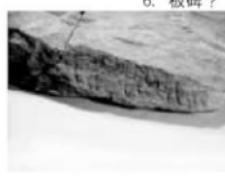
6. 板碑？ (R006)



4. 古銭



5. 近世磁器碗 (R005)



7. 側面の加工痕跡

出土遺物

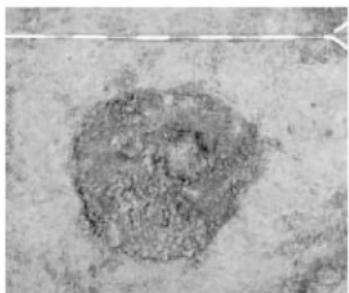
図版 9 本寺地区



近景（南から）



調査区全景（南から）



ピット1検出状況（西から）



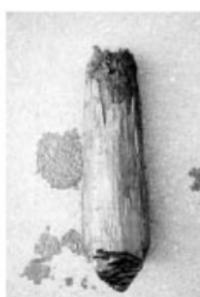
ピット1断面（西から）



近世陶器

土師質土器

廃土出土遺物



柱材



出土遺物

図版10 新井堀地区

報告書抄録

ふりがな	しもとみまえいせき						
書名	下富前遺跡						
副書名	富地区県営担い手育成ほ場整備事業に係る発掘調査報告書Ⅲ						
巻次							
シリーズ名	瀬峰町文化財調査報告書						
シリーズ番号	第23集						
編集者	安達訓仁						
編集機関	瀬峰町教育委員会						
所在地	宮城県栗原郡瀬峰町藤沢字下田32-1 TEL (0228) 38-2171・2172						
刊行年月日	西暦2004年3月24日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 在地	コード 市町村 道路番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
しもとみまえいせき 下富前遺跡	宮城県栗原郡 瀬峰町大里 字富下富前	045268 46047	38° 38' 47"	141° 4' 21"	2002.10.23 ~10.25	10	県営ほ場整備に 係わる事前調査
					2002.2.28 ~3.3	400	
					2002.11.10 ~12.16	700	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
下富前遺跡	集落跡	古代・中世	竪穴住居跡2棟・堀立柱建物跡5棟・塙跡1条・土皇11基・井戸跡5基・溝跡9条・ピット164基	縄文土器、土師器、須恵器、赤焼き土器、中世陶器、土師質土器、石製品、板碑?、鉄製品	19号建物跡は平安時代のもので、桁行5間、梁行2間で東側に廂をもつことが判明した。また、遺跡東側で塙に囲まれた屋敷を確認した。		

瀬峰町文化財調査報告書 第23集
下富前遺跡

平成16年3月18日 印刷

平成16年3月24日 発行

発行 瀬峰町教育委員会

〒989-4502 宮城県栗原郡瀬峰町藤沢字下H32-1

TEL 0228 38-2171~2172

印刷 南部屋印刷株式会社

〒987-2215 宮城県栗原郡柴田町高田一丁目7-36

TEL 0228 22-2131
